WASON
Dec 18--
no. 417

明治十八年初刊
每月廿五日發兌

女學雜誌

第四百拾七號

要目

社說

歲暮の回顧及び警戒……
島國たるとを自負せよ……
朝鮮國の教育……
群馬縣の痛歎……

女學

女學校の美育……
花園隨筆(其二)……古在豐子
用心錄(其二)(大勇は恐懼す○與へて取る○養心は分限を守るに在り○學者は推移す○覺悟○危ければ奢らず)
姿見のうつし(其二)……
兒童の研究……

評論

短歌國粹の辯……
演藝論……小此木信一郎
俳諧雜記……知十坊

新刊書

明治評論第一號○日本の家庭第一號○阿秋○夏被ひ○ヘルベルトの研究○閨秀小說……

爛煥

杜子美佳人譯……森愛軒
佳人の四季……天仙子
樹玉集……泡鳴子

片々

野中至氏夫妻○大佐ライト夫人小傳○群馬縣公娼再置問題○神戶女學院二十年紀○家庭さ佛教○晉西亞の婦人○新設計畫中の女學校○女權の擴張○同志社女學校秋期運動○長崎婦人會○基友會○横濱婦人矯風會○名古屋婦人講話會○東京婦人矯風會○歐洲諸國の結婚及び產兒統計○露點々

明治二十八年十二月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百拾六號目錄

社說
日本的新女子教育 姿見のうつし（女學勃興の呼聲）

評論
偶評文（其の下） 如十坊
外人の評したる今の教育家（[illegible]）指の心想

閨媛
心身鍛錬の一助（下）（[illegible]） 山月子
旅路ならん哉 紅合吉子
今むかし [illegible] 文子
[illegible]子なおもひ出て 泡鳴子
四首 流水子
葉堂子
精子

女學
女子教育に就て 吉在野子
婦人の[illegible] 山下石碧
用心の[illegible] [illegible]の心[illegible]
[illegible]なき人の花見 好たる

隨感
方今の婦人の[illegible]正しき[illegible]者
[illegible]世の[illegible]
自由[illegible]の[illegible]代の[illegible]
下見なる偉人物 濶村

新刊書
女子日本[illegible] 新体詩集へまきぬ 皆流日
入道 不如歸 [illegible] 青年健康學

片々
婦人共立育兒會の女學勃興の状況 女子中等教育の[illegible]
當今の婦人の[illegible]
入合 天保婦人合 [illegible]
以下數件

露點々
參考新聞雜誌上女論說紹介十九項

金五圓也　在臺灣陸軍中尉　齋藤音作

右前々號掲載せる岡山孤兒院寄附金追加

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は、普通孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て、教育學上の進歩なみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人義士の義捐金によるを以て、教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上、學教育上の整頓を求めんに其便りを得ずして院長は太だく心を痛めらるる由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歳に達せり、其前途身を立するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同志の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別資本として資金供給の方を與へられんことを祈る。之が爲めに定むる所の要法如左。

一　茲に孤女學院の女子教育及孤女立身の二事の爲に此資金を募集し、此資金を名けて孤女學院特別資本と云ふ。

二　此資本は[illegible]事業に最も[illegible]從事すべき元とも定め[illegible]積みて募集する[illegible]

三　此資本の[illegible]は[illegible]して使用するものとす、孤女學院の生計費に[illegible]

四　[illegible]分を女學に[illegible]て孤女の[illegible]分を立身費に充つべし

巖本善治　小島[illegible]　田村直臣　名出保太郎　吉在さま　下野はま
石井[illegible]　加藤[illegible]　津田[illegible]　下島[illegible]　青木まき　杉浦[illegible]

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

女學雜誌社發兌書目

若松賤子譯 再版	小公子	一册廿八錢 郵税八錢
鈴木弘恭大人講述 六版	百人一首講義	一册廿五錢 郵税四錢
巖本善治君著	吾黨之女子教育	一册八錢 郵税二錢
布川靜淵君著	俳諧史傳	一册廿七錢 郵税四錢
クリスマス用	詩とき猫と鼠	一册四錢 郵税二錢
中島俊子君著 小說	善惡の岐	一册十七錢 郵税四錢
巖本善治君著	木村鐙子小傳	一册八錢 郵税二錢
櫻井成明君著	腓立比物語	一册廿八錢 郵税六錢
巖本善治君著	教育學講義	一册七錢 郵税二錢
巖本善治君著	高橋傳五郎	一册五錢 郵税二錢
巖本善治君著	公娼可滅	一册三錢 郵税二錢
	日本女學	一册四錢 郵税二錢
鈴木弘恭大人著	文法口授	一册十二錢 郵税二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百拾七號

明治二十八年十二月二十五日發兌

社說

歲暮の回顧及警戒

茲に、明治二十八年の往くを送りて種々の感慨あり。人生の行歩は實に不可思議にして、寸前の變化を明らかに豫察し得たるものは曾て太はだ稀なり。去年、俄然として戰端の啓けたるや、既に預想外なりき。戰かつて大いに勝ち、斯迄に支那大帝國が弱からんとは、また何人か想定せし。當時、國民皆な膨脹し、元氣充滿し、一種の奇しき風全國に吹渡りて、前途の春意爛熳として只だ盛んなりき。此時に方りて、誰か亦た今日の枯冬あることを知らんや。而して、嚴冬に接し、人意自から寒きの今日、來らんとするものの果して如何なるかを、今にして明らかに言ひ得るものは蓋し多からじ。

左れば、人の現世に處する、自から招かざるの大勢次第に來り亦た往くに際會して、斷えず不可思議の運命と相ひ逢觸す。必らずしも、幸はひならず、亦必らずしも、不幸ならず。若し心外形式の上に現はれたる幸不幸をもつて之を論ぜば、因果應報の道決して明らかならずと言はずんばある可らず。但だ仁を求めて仁を得、安きを貧富榮辱の形の上に寓せずして、之を純ばら衷心恥ぢざるの邊りに探るに及んで、初めて悟る所あり。國家の進退は、步行濶大なるが故に、應報の來ること遲し。遲しといへども、必らずや、則あり。個人、此中に漂よひて、大勢の流行の間だに、其言動の因果を履む。故に、幸不幸の形式に就て之を言はば、存外の變化あるべし、誰か豫じめ之を知らんや。左れども、幸不幸の心衷の平安に就て言はば、誰か能く應報の道を動かさんや。此に於てか、知る、人生無常、天運定めなしと雖ども、人の履行すべき道に至ては、則ち昭々として極めて明白なることを。

此故に、時非なりとも、望を失ふことなかれ。時是なりとも奢り驕ぶること莫れ。吾れ爲す有りて而も動かずと雖ども、止む

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ると莫れ、動かざる可からざるものは、其の動かざるにより
て彌よ動かすとを勵する莫れ。俗意の人は、ことに戒心すべ
し、未だ雨ふらざるとき必らずや牖戸をつくろふべし。逆境
に處しては、隆んに元氣を鼓舞し、起つて活動し、倒れて后
ち止むべし。これ后人を起す唯一の活ける血なり。凡そ此等
の福音は、去今二歳に涉れる帝國の時勢が、吾等個々に教訓
する所ろのもの也。讀者今ま之を聽かざる可からず。

且や、女學の大勢、果して挽回し來れり。廿二三年以來、逆
流に游泳し、反動に勞苦し、孤忠を守つて堅持して斯道の爲
めに苦戰しつる諸君子は、今にして初めて暗黑を出でたらん
が如く感覺せらるべし。則はち、之れ大いに警戒し、一層の
細心をもて前途を經營すべきの機節なり。惟ふに、一旦足を
揭げたる此の挽回の大勢は、從來の經驗によるに、凡そ五ヶ
年內外が程は、日に月に進步して其の積極に到達すべし。故
に此間、尤とも諸君子が慘憺たる經營を施して、善く利導し
其弊を矯めて、其益を煥發せしめ、今回の一期、隆んに女學
の好結果を成就せしむべき大責任の時にあらずや。

島國たるを自負せよ

近來、文士の間だに『島國』なる語、流行す。曰く、島國思
想。曰く、島國哲學と。

其の意、吾が帝國の島國なるが故に、其の規摸、万事に於て
狹隘なりと言ふにあり。島國なれば、國民の思想は狹隘なる
ものにや、若くは、島國を小さしとして、自からさもしく感
ずるの心が即はち狹隘なるものにや、開頭先づ一番の研究を
要す。

國の面積の大なるより言はば、目前に支那國なるものあり。
然れど、吾同胞は、之を指ざして直に國家の大を成せるもの
とは見做すまじ。左らば、國家の偉大なるは、必らずしも、
其の廣袤の謂ひにあらじ。日東の聖地に立てる吾帝國は、古
來、未だ曾て他を侵掠して以て地積を殖やしたるとあらず。『總
ての國、皆な其地と其時との預かじめ定められたる』を順守
して、安んじて、旭日先づ登る邊に蹯據したり。故に、吾帝
國は俯仰天地に恥るとなく、神聖なる歷史の一葉をも汚すと
なくして、此の島國に立てり。此地、皇天の賜へる所ろ、此

座、祖宗の造れる所ろ、同胞一和して二千六百年の建國を置ゆ。まことに、是れ、感謝して榮えとし、誇りて天下に示すべきものにあらずや。

左らば、吾島國は、其小なるによりて恥づべからず、寧ろ、之を以て誇りとすべし。

文士いはく、吾等、之を誇らんとせざるにはあらず、但だ天地の俄かに改造しがたきを奈何んせん。何等の形容詞をもて巧みに之を飾るとも、吾島國の狹きとは狹きとなり。此の狹きものが同胞の心衷に影響するとは事實にして、暴りに消すべからず、其感化の滅しがたきを奈何んせんト。

而も、此れ倘ほ文士自から弱膽を告白する也、吾島國同胞の普通の自識にはあらず。抑そも、吾島國を狹隘なりと感覺せる自識は、果して幾何許りの普通人の間だに存在する乎。昔しは、桃源をもて天地としたり、一藩をもて世界としたり、天竺は高き所ろにあり、支那は彼方にあり、西洋は西の方にありとしたる迄にて、孰れか能く其の廣袤を比較せんや。たとひ比較したりとも、能く其の懸隔を實認覺識したるものはあるとなし。其の僅かに是れありしは、現に海外の諸大國と交接し、事實上の衝突に逢ひ、實地に吾島國の實力の足らざるを感覺したる當路者、もしくは先覺のみ。一錢の貯蓄なき貧兒が、巨万の富人の富を聞くも算數上の懸隔は左したる感化を其の心衷に及ぼすとなし、但だ之と實地の交接を爲したるときに於て則はち初めて影響を惹起するに喩ふ。島國の狹隘なりてふ事實は、未だ曾て一般人士の自覺の上に及びたるにあらず、故に之によりて其國風を左右したることはなき也。但だ之れあるは、物識りに於て初まる、かゝる感應ありなど論議せる文士其人に於て初まる。即はち知る、『島國』の狹隘なることを自覺して、さもしく感じ出せるは、今の文士を以て初めとす。左らば、其の影響は今に於て防ぎ止めずんばある可らず。文士、先づ其の貧相なる弱思を飜がへすべき筈也。

英國人などは、其國の島國なるを誇りとす。苟くも、自信あらんものは、皆な斯くあるべき譯なり。之を况んや、吾が日本帝國の如きに於てをや。既に、歴史に於て誇りあり、同族に於て誇りあり。今や亦た軍司令部の地位に立ちて、亜細亜全洲に指揮せんとするに方り、吾國積の狹きなどを自覺すべ

き害のものならんや。戰に臨んでは、一將、万卒を率う、軍司令部の圖形は、もとより全軍の形よりも小なりとは雖ども豈自から其の小面積を恥ることをせんや。方今の世界、國民として能く一和せるもの、吾帝國の如きある乎。何如なる變革ありとも、此の島國の分裂することなきほどに強固なる國家は何處にある乎。少年識者にして、國家學を外國に學ぶものあれども、夫は大なる誤まりにて、日本は其國家學を天下に教ふることをすれ、敢て他に學ぶべきものあるなし。國家、國民としての最上の理想に達したる現實を世界に示さんと、是れ日本の國粹の一ッ也。

左らは、何によつて吾島國を恥んとはするぞ。吾島國は、恥の狹隘にあらずして、誇りの固結なり。當に隆んに揚言して堂々として天下に臨むべし。『島國』と云へる文字は、今後、吾同胞の自負の言葉たらしめたし。今の文士が往々自から海んじて島國々々など悲しげに歎くは、如何なる陋見ぞや。乞ふ願はくは、此の文字の流行の最初に於て、其の意味を一變せしめん。

朝鮮國の教育

朝鮮の獨立扶植の爲めに發せられたる　詔勅は、嚴として存す。世界の衆目之を視て、新らしく記臆せり。吾等臣民、皆な其分を盡して、各自、大御心を奉躰すべきにあらずや。大日本海外教育會なるものの最初の事業は、即はち、此に則とり、先づ朝鮮國に教育を布くことにてありき。

今や、朝鮮國に於ける種々の事業退歩せんとす、眞とに慨すべきの事とす。幸ひにして反つて海外教育會の事業の着々として進歩するを見る、賀せざるべけんや。

大日本海外教育會は、來年一月より、朝鮮國京城に於て、一學校を開き、名けて京城學堂と云ふものを創むとぞ。

群馬縣の痛歎

群馬縣に於ける公娼設置建議の不在多數によりての通過は、近來の恨事とす。縣下の輿論を精察せば、知事は素より之に認可を與ふることをせじ。左れど、たとひ種々の隱微なる計畫によつての成就と雖ども、公然たる此通過は、深く慨歎すべきの事とす。吾黨眞に再たび黽めざるべからざる也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

女學校の美育

（上）

今の敎育に最も多く欠げたるものは美育なり。美育は、他の三育に比較して敢て及ばざるほどに欠けたればこそ、前年或る代議士も、大いに當惑したるなれ。渠れ太はだ惑ふて問へらく、美育は、智育、德育、躰育の中の何れに屬すべきものに候乎と。

夫れ、美育の欠けたるは、今の敎育の一般の通弊なり。左れど、取分け此欠乏の甚だしく感ぜらるるは、女學校に於てなるべし。女學校の美育を重んずべきは、論ずる迄もなし。然るに、今日の女學校が之を欠乏することの多きも亦た辯ずることを要せざるほどなり。

スペンサーは、美を餘力餘暇の製産物と論じ做して、隨つて美育の亦た餘れる時間、餘れる學年に於て施こすべきものと見做し、之に重きを措かざりき。此れ一異論を要することなるが、就中、女子敎育に於ては、尤も然りとなす。女子敎育に於ての美育は、其の装飾の爲めにあらず、實に其の切要實利たる故也。

ホームを樂しくするものは、美の好みを滿足するによるを多しとす。たとひ、貧しくとも、此の好みを滿足せしむれば、人はたんのふすべし。之に反し、假令富めりとも、此の好みにして、不滿足を感ずれば、何となく厭足らず感ずべし。故に節儉家は、膳部の器具を奇麗にし、之が爲めに錢を費やすことを惜まずと云へり。蓋し、器具の買入は一時なれども、日々の食慾は限りなきことゆゑ、則はち器は善くして、食物を悪くし、粗食粗菜にて之を美くしき器に盛るときは、幾分の滿足を感じて、慰さめを得、以て久しき間だに莫大の儉約を爲し得るが爲めなりとぞ。

故に、一品、一具の買入方にても、美の趣味によりて好く撰ぶときは、同樣の直段ながら、引立ちて見ゆるものと、然らざるものとの相違あるべし。又、同じ品と雖ども、其の置樣、飾り樣の次第によりて、見榮えの宜しきと悪しきとあり。

此等の事情相合して、家庭の内部を樂しくも、亦不愉快にもすると也。

例せば、一本の澤庵漬にても、其の切り樣と列べ樣とにより、又は何品か一寸と加味するもの有ると無きとによつて、人の感じの上に非常の相違を生ずべし。漬物に於てすら斯の如くなれば、他の品々に於ける影響の莫大なるとは、容易に推知せらるべし。

故に、美は一種の經濟の源にて、家政調理の上に大切の功を奏するもの也。左れば、美は贅澤の奢りの事にあらず、誠とに實利實益とも大關係あるもの也。其他、美の純性質が婦女子の氣質、品格、風采、言動等に及ぼす影響に至りては、今更ら申す迄もなきと也。

女子教育に斯迄で大切なるものなれば、美育の重んずべきとは、女學者の皆な知る所ならんなれども、其の實際に施行せらるるとの存外に少なきは何故ぞと問ふに、一つには、其の費用多くして行はれがたきの故によると多きを知る也。左れど、費用多からずして施行すべき方術も亦無きにあらざるべければ、女學者たるものは、大いに其の講究に着眼せざる可らざる也。

(下)

茲に吾人が思ふ條々を簡短に略記す、

一　美術的の文藝を、美的に談話せず、反つて之に厭倦を生ぜしむるほど、美術思想を害するとはなし。

二　人の無頓着に有すごす題目を捉らえて、之が美を發揮し、愕然警醒して之に注意せしむるやう談話するほど、美術思想を益するとはなし。

三　大いに美の思想を煥發せしめ、一紀元を開かしむるほどに刺激する教養には男女ともに其男女となるの時代(譬綾り、もしくは用客によつて知らるる時)を利用すべし。

四　博物館、共進會、繪畫展覽會の類に伴ひ縱覽せしむべし。

五　古器、器物などの借用せらるるものある時は、利用して説明し、就て趣味を涵養せしむべし。

六　古人が美術的の用心の精細なりし實話を談じ聞すべし

七　取締又は役員などは、實行に於て、其の美の覺悟を示すべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

八　女の美術的のタシナミは、元と習慣に由來すると多きものゆゑ、單に學力が增したりとて分るものにあらず。故に屢ば話しきかせ、又は不行儀と見ゆるとき、一々注意して敎へ示すべし。

以上は、如何なる不完全の學校にても行ひ得べきものを指示せり。而して、此等の條々と連關したる小目は、記載するまでもなく明白ならんとて、讀者の推考に任す。

花園隨筆

（其二）

古在豐子

○二三歳なる幼兒の、智識を得むと力むるは、餓たるものゝ食を乞ふよりも、切なりてふとは兼て聞つるものから、實にも左程のものならむとは、我兒に接する今日此頃まで知らで過しぬ。是は何、彼は何とて、見るもの、聞くもの一々尋ね問はるゝに、忙しき時などは、隨分迷惑なるものなれど、かゝる時にも等閑にはせで敎ふるこそと、思ひかへしてそれ〲の答は與ふれど、如何答ふべきにや、頓には考へ得られぬ六

かしき問題を出さるゝぞ當惑の極みなる。假令ば土を指して是は何と問ふにぞ、其は土なりと答へしに、彼は又更に土とは何てふ問を起しぬ。かゝる問に對して、土の作用を述むは不相應也、土の成立ちを說かむには、我さへ誠に其を知れりや否や覺束なきと、爭で簡短に答へむなど、彼是思ひ煩ふ內、彼は頻りに其答を促して止まず、餘儀なく曖昧なる答をなして其場は濟せしかどかゝる六かしき問を出さるゝは、屢々ある事にて、其を一々眞面目に說きたらむには、母たる我は哲學者たるの智識をも、理學者たるの智識をも、兼ね備へでは叶はじと思はるゝ程なりかし。さあれかゝる幼きものに對し學理を說くも會得すまじく、又說き得べき力を今俄に得らるべしとも思はねど、平生何事にあれ注意して寧ろ淺くとも汎く多く記臆なし置きて、此小さき哲學生理學生の問に對し、何樣にか間違なき答をなして、如何なる種子をも蒔かるゝ事を求むる智惠の田に後の助けとなるべき種子を一粒にても多く蒔き置たきものと思ふなり。

○幼兒の問に就ては、尙ほ一ツの工夫すべき事あり。假令ば道行く人を見て、彼人は誰、彼は何しに、何處に行くにやな

んど、知るべくもあらぬこと、問ふとあり、かゝる時其は知らずと答へたらむには、彼はなか〳〵に承知すべくもあらず我にむつがらるゝとの煩しさに、よきほどの名を付して或は甲さんとか、乙さんとかいひ、又何々の用事に行くならむなど答へ置くものから、しかいふとのよきやあしきやは、未だ我心に定め兼ねつ。又新聞紙の廣告なんどに、カバン時計などの畫きあるを見て、是は誰のカバンなりや時計にやなんど問ふとあり。其は誰のにてもなし、時計屋のなりカバン屋のなりと答へむには承知せずよりて誰にてもあれ、其を持ち居しを見しとある人の中に就きて、是は誰のなり彼のなりといはゞ容易く首肯くなど嚴格にいはゞ僞りともなるべきとをも、斷假設の答へをせざらむとせば柱に膠して琴を彈ずる類に陷りやせむ。さはとてかゝる事をいひもてゆき、后の日に至り其志かわらざるとを覺りたらむには、我を僞れるものと思ふなるべしと、我はかゝる場合に何れの方法によるべき乎を知らず、世の母君達は如何思ひ玉ふにや、聞かまほし。

○幼兒の心ほど、無邪氣なるものはなし、彼は或時おのが兩手をながめ、左の手を出して、こちらの手々は、おとなしい、こちらの手はいたづらものといひて左の手を打ちしを、成程一理は其裡にありて如何にも可憐に覺へし也。

○近き邊りに住めるものゝ妻なにがし、或日おのが子の滿一年餘りなるを抱きて、其が隣りなる家に遊ばせ居たるが、やがて暇を告げて立出るとて不圖其兒の手に彼家の子供の玩具を持ち居たるを見出し、いつの間にこんなものを盜んで來たのといひしを、われ計らずも通りかゝりてうち聞き、思はずも身慄しぬ。無心なる稚兒の、自他の差別なきまゝに、手にしたるものを、いやしき大人の心もて、盜むてふ名を下し、夢にだも知らぬ盜てふとも、母の口より教ふるときは、さても〳〵心なきとかなと思ふにつけ、餘所の事ながら、我上にも、かゝる例の倣は多くありぬべきにかと、うしろめたき心地しぬ。

○老人といふものゝ小言多くいふは、若きものよりも、さま〴〵の經驗上用意細かくなり來りたるにも依るべけれど、一ツには又心氣衰へて、堪忍てふ氣力の薄らぎたるにもよるべくやなんど思ひ居たりしが、近頃又更に一ツの原因を見出し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ぬ、其は色氣てふもの全く失せたるによれるにはあらずやと思はる。色氣といへば、何とやらむ奇異に聞ゆめれど、若きものにありては、誰しも人に悪しく思はれじと思ふ心あるより、いひ度き事をもいはで忍び、いはでもの世辭をも、いひなどして、左迄胸潤からぬものも、兎に角にかたち繕ひゆくなれど、老てはさる心全たく失するより、思ふほどの事打出ていふにやあらむ。是は色氣の失せたるにこそなんど、おのが老ゆかむ末をも思はで、老人の品定めするもをこなりや。

用心録（二）

山下石翁

○大勇は恐懼す

福島正則の家人に、笹の才藏とて大武功の勇士あり。關ヶ原合戰の時、才藏に若士一人指そへて使者にやらるゝに、若士申しけるは、竹矢來の外を通らんと。才藏聞きて、敵方よりの矢玉雨の如し、我等は同道申すまじとて、内を行く。若士の曰く、外を通りたりとて、何程の事かあるべきやとて、外をゆきしが、運よくて無事に到り着きぬ、才藏は内を行しゆゑ素より別狀なし。兩人出あひて用事を先方へ申述べ歸らんとす。こゝに於て、若士申すは、才藏殿はよき分別にて内を通られたり、矢玉はげしくして命あやふかりしと、舌ぶるひす。才藏申すは、先刻は大事の御使を承はりしゆゑ、身を惜みたれ、こたびこそイザ同道して一愉快すべしと促がせば、若士は戰慄して辭しぬ。才藏ひとり大手をふつて竹矢來の外を通り、歸りけり。

○與へて取る

大坂手切の時、米二万俵大坂城にあり。板倉伊賀守方より大坂へ申送りけるは、此度手切の段、是非に及ばず、夫に付、其地に家康兵粮二万俵こめ置候、此節御籠城の兵粮に少分ながら進上致し候と申し遣はす。大坂方にては、固より此米を奪ひ取つて兵粮にせんとの覺悟にてありしかど、進上致すとあるに依て詮議まち〳〵になり、敵より兵粮をもらひ籠城せん事、武士の恥なるべしとて、一粒も申受けず、其元へ引取られ候樣にと返答す。其時、武士は一人も遣はさず、大坂の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

町人に申しつけて京都へ取よせたり。結句、秀頼方よりは、奉行を出し、今度、家康、米を京都へ引とらせ候に付、狼藉乱妨これなき様にと申しふれられ難なく残らず引取けり。

○養心は分限を守るにあり

貝原益軒曰く、家園を治め、草木を植うるは、素より氣を養ひ心を樂しましめん爲なるに、心を用ひ過ごして心を勞し、功を費やし、家僕を勞せしむるは、心を養ふ物を以て却りて心を苦しめ、際を費やすなり。損ありて益なし。

○學者は推移す

林子平曰く、學者は能く世と推し移りて、そげ者にならざるやうに、心掛くべし。推し移るとは唐風にならず、古風にならず、今樣に過ぎず、偏文に陷らず、偏武に陷らず、堅過ぎず、時代時代所々の俗に隨ひて安らかに交はるべし、是れ學者の心掛なり。父兄たる人、此節合を能く呑込て、子弟を教へ立つべし。但し推し移り過ぐれば、俗にいふ通人氣取に成りて實地を失ふとある也。移りは移りても、守本陣の本心をば少しも動かさゞるやうにすべし。

○覺悟

安積艮齋曰く、覺悟ある人は事變に臨みて驚かず、覺悟なき人は、狼狽して度を失ふなり。一點の火にても思寄らざる時、手に當れば驚きて色を變ず。大の灸にても、覺悟して灼すれば驚ろくことなし。

○危ければ奔らず

清正、蔚山籠城の時、三の丸に廣き小山あり。城中手狹なれば、これへ小屋をかくべしとて、家人に命じて爰かしこと指圖する所に、蔚山の北に當りて城中を目の下に見おろす山あり、此へ明兵とり上りて、石火矢を打かけたり。清正の兵卒四五人胴中より打ぬかれたり。左れども騒ぐと喚れと制して清正少しも騒がず。又打かけけるが、芝原へ打込だり。明兵之を見て、敵の少しも騒がぬは見當ちがひしと見へたりと、目あてを替へて發しける。三番目の玉は本丸より遙か高く雲中を打通る。其時、清正立退けと各々ペラ〱と本陣へ引入たり。此騒ぎ散しを見て、三番目の玉よき圖と思ひ、其后もひたと打けれども、玉は虚空へのみそれけり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

姿見のうつし（其二）

明治二十年一月

○文部省公私立女學校監督法を編纂す、
○大阪川口に大阪一致女學校起る、私立三重女學校起る。
○大學教授矢田部良吉大日本教育會に「女子教育論」をなす。
○大阪の基督教徒婦人勸業會を起す。
○女學雜誌第三回懸賞論文「日本婦人授產策」を掲載し始む。
○曾て帝國大學入學を志願したる木村秀女、さきに醫科大學撰科生たるとを許されしが、今又新に女子專門學校を小石川に起す。
○駿州三島の豪商花島小出の兩人私財を投して一女學校を新設せんとす。
○皇后陛下慈惠醫院を起され有栖川宮妃殿下同院幹事長たり。
○西京私立女學校創立せらる。
○皇后陛下婦女服制につきての思食書を賜はる。
○鐘が江ろく子麴町區に佛語女學校を設く。
○本派本願寺京都に一大女學校を新設するの計畫あり。
○神田錦町の女子職業女學校官立たらんとす。
○帝國大學英語會第一回の討論題は『英米婦人が社會上に有する特權を移して全く之を日本婦人に與ふるの利害』
●西村茂樹男女相擇ぶの說を公にす。
●豐橋手藝學校藝娼妓を教育す。
○東京牛込英和學校女子部を新設す。
○兵庫縣原女工塲宮城縣白石婦人談話會、東京淑女會等。甲府女子交際會、武州船橋婦人勸業會、仙臺婦人攻藝會、廣島婦人協會、等創設せらる。

●二月

○大阪新町女學校藝娼妓の入學するもの多きを加ふ。
○婦人洋服裁縫學校東京京橋に起り、洋服裁縫女學校麴町に起る。
○大阪新町に藝娼妓女學校新設せらる。
○島田三郎東京婦人矯風會に「開化に對する婦人の心得」を說く。
○帝國大學教授及外國雇教師等の發起にかゝる女子教育奬勵會の主意書羅馬字雜誌上にて公にせらる。
●伊藤伯爵夫人京都尋常中學校に於て演說す。
○東京市内の長老教會派女學校合併して一の大女學校を設くるの計畫あり。
○京都府知事曩に女風改良の諭達をなせし以來、新平民の婦女に至るまで束髮をなす。
○佛教者女學會起らんとし、日蓮宗もまた女學校設立の計畫をなす。
○東京女工練習會、宇都宮婦人協會、上州藤岡婦人會、東京牛込婦人會、大坂婦人奬業會、肥後三池婦人會、上州館林婦人會發起せらる。

●三月

○皇后陛下「金剛石」及び「水は器に」の御詠を華族女學校に下賜せらる。
○東京婦人矯風會大演說會を厚生館に開く。同會は昨年十二月發會式を擧げたり。
○小石川婦人談話會第一回に外山大學教授の演說あり。
○築地明石町監督教會に女子教育の一科を設けんとす。神田英學館女子部を設く。
○愛媛縣廳の判任官以上の妻娘とも自今洋服を着するとの協議をなす。髙木軍醫總監の地方遊說及び 皇后陛下關西御臨啓は婦女洋服の流行を盛んにす。
○高知縣會高等女學校設立を可決す。
○穗積博士高等女學校にて「女學生に告ぐ」を演す。
○府下の洋服店男子の洋服よりも却て女子の洋服の方多くの注文を受け柳原の古洋服店女洋服の釣下りたるを見る。
●地方官諮問會のため上京したる各縣知事は孰れも夫人同伴にて上京す、此際知事夫人同伴懇親會を開かんとするものなり。
○築地海岸女學校神田に分校を起さんとす。
●大阪婦人社會に乘馬流行し始む。
○神田駿臺成立學舍新に女子部を設く。
○仙臺鎭臺の將校の妻女は米國教師を聘して英語を修め、洋食調理法を學ぶ。
○大阪女子講學會、名古屋婦人共益會、高崎女子の友會、京都婦人割烹會起る。
○新潟婦人懇親會、京都婦人會、京都婦人衣服改良會、大阪婦人教育改良懇親會、東京婦人工藝會、千葉婦人懇親會、久留米婦人協會、小倉婦人協會、遠州掛川婦人改良會等發起せられ、大阪婦人學習會發會式をなす。

●四月

○仙臺の首藤陸三等仙臺英和女學校を起さんとす。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○京都の皇族華族方の夫人英國女禮式を講究す。

○外山博士高等女學校に「英學の大切」を講す。

●高等女學校の教員及び帝國大學教授諸氏發意にて和樂會なるものを設く、目的は合唱舞踏音樂等を以て善良なる男女交際をなすにあり。先是某々貴顯等發企して高等女學校生徒と帝國大學々生とを會して踏舞會を開かんとしたることあり。

○京都府は小學校男女教員共に洋服に改むべきを達す。

○大阪の高櫓の紳商相集り山の外妓英語を學ぶもの多し。

○札幌に生海苔女工學校起らんとす。

○東京木挽町江東女子小學校に西洋婦人を聘して高等科生徒に英語を授け、また生徒一同をして一期の代價十圓の洋服を着せしめんとす。

○大津公立女學校起る。

○國民の友第三號「日本婦人論」を掲載す。

○大鳥圭介華族女學校々長となる。

○青山徳川邸内に女學校起る。函館女子師範學校廢止。

○久松定弘(前)獨逸學士ザウヰンゲ氏著「女子高等教育論」を翻譯出板す。

○大分縣婦人慈善會、京都婦人會設立、名古屋婦人倶樂部、大阪眞宗婦人協會等、大坂婦人会、伊予鶴山女工場、静岡婦人交際會、石卷婦人談話會、三重縣安濃津婦人会、札幌婦人教育会、前橋宮崎聯合婦人教育談話會、京都婦人集、慈善會を起せらる。京都婦人慈善會、大阪婦人慈善會共に發會式を舉ぐ。

●五月

○議員の夫人夜會を開催し、禁酒を實行し、九人の婦女また之に與む。

○日本基督教會同盟會、政府に公娼廢止の建議せんことを決す。

○東北基督教會婦人會を仙臺に開く。

○華族女學校生徒洋服着用規則出づ。

○長崎基督教會一女學校を起さんとす。大坂川口ウヰルミナ女學校開校す。新潟女學校設立。

○報知新聞「男女交際論」をなす。

○東京、仙臺、山形、名古屋、大坂等の藝娼妓英學を研究す。

○井上某英國ドイク夫人著「細君の友」を翻譯出板す。

●某大官人某邸の宴會に某貴女に迫りたりとの風説世に囂し。

●女學雜誌第六十五號「姦淫の空氣」を論じて、發行を停止せらる。

○埼玉婦人協會、紋鼈婦人會、近江久居女工場等發起せらる。

●六月

○高木兼寛厚生館に婦人のみを集めて演說す。

○上流の紳士東京女學館を新設せんとす。

○芝區に東京女學起る。

○地方束髮流行益盛んなり。

○大坂藝妓演說會盛開かる。

○成立學舍女子部講義錄出づ。

○越前武生に妓風改良會を起すものあり。

●七月

○婦人雜誌「いらつめ」新に發行せらる。

●東京高等女學校は裁縫の一科を除くの外、家政教育は悉く西洋風となす。

○大學講義室に東京婦人教育會を開く。

○名古屋に愛知女學校起り、札幌女子職業學校開校式を擧ぐ。

○伊藤伯夫人等婦人手藝學校を起さんとす。

●時事新報某教育女學校の教育法を評して、其弊害を指摘す。

○茨城婦人協會、常陸婦人慈善會、筑後柳河婦人協會、埼玉婦人協會、宮城縣栗原婦人會、群馬縣矢中婦人協會、仙臺婦人矯風會、熊本婦人談話會等發起せらる。

●八月

○文部省女子體育法を制定せんとす。

○大谷派本願寺女學校を設立せんとす。

○神戸有志者私立女子手藝學校を開く。

●貴紳の夫人令嬢は是迄舞踏にのみ熱心なりしが、此頃婦人乘馬論を主唱するものあり、各自邸に馬場を開くか或は一大稽古場を設けんと相談中。

○矢島錦蔵氏譯シヤトー著「女德新說」を翻譯出板す。

●森文部大臣女教師の養成を十分にして將來の小學教育を擧げて女子の手に委ぬるも可なりと談す。

○跡見女學校二万圓を投じて小石川に一大校舍を新築せんとす。

○新島襄等京都府病婦學校新設の請願をなす。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○東京本郷に讀美女學校起る。
○東京府下の有志者青山に英吉利學校を設け、之に女子學校を附屬せしめんとす。また辻新次、川田剛等の贊助によりて麴町に女範學校を起さんとするものあり。
○滋賀縣大津に一女學校起らんとす。
○博文館『日本の女學』第一號を發行す。
○高知女子師範學校卒業生發起婦人矯正會、東京通信婦人講談會、攝津尾崎女子手藝會、信州上田女子談話會、西京桃花女工場、濱松婦人交際會、高知婦人談話會等起る。

●九月

○東京神田に女子佛學校起る。長崎ステルジイス女學校開校。
○東京教育社「貴女の友」第一號を發兌す。
○麴町の佛語女學校、築地に移轉して高等佛和女學校となる。
○堺區立女學校を設立せんとす。山口女學校前橋清揚女學校設立せらる。
○大阪西區府會議員私立女學校設立の計畫をなす。長野縣師範學校女子部新設の企てあり。
○谷中將婦人の精神氣力を養成するは我日本今日の一大業務なるへしと談す。
○大日本私立婦人衞生會、京都婦人共勵會、横濱婦人交際會、和歌山縣新宮婦人同志會等發起せらる。

●十月

○英國女皇五十年祭の寄附金を以て横濱にヴクトリア女學校を開設す。
○舊東京女子師範學校生徒百數十名淺草鷗游館に親睦會を開く。
○京都府產婆講習所設けらる。
○箕作佳吉東京高等女學校々長に兼任す。
○山岡鐵舟を顧問として日本橋區に女子經世學校起る。
●東京結婚契約會所設立の願出をなすものあり。
○高等師範學校女子部生徒の冬洋服一組代價六圓五十錢。
●貴顯數名婦人乘馬短銃練習會なるものを設けんと周旋す。
○長崎師範學校女子部生徒は一同洋服に改む。
○大阪に婦人英語會なるもの設立せらる。
○高知尋常中學校に女子部を新設す。
○松山婦人會、大津婦人會、東京淑女以文會、大津婦人慈善會、金澤婦人慈善會、富山婦人交際會、佐賀婦人協會等發起せらる。

●十一月

○明治女學校九段坂上の新築校舍に移轉す。
○赤坂門內に華族女學校新築の工事を起す。
●伊藤首相等大に有志と女子教育獎勵會の擴張を計る。
○師範學校女子部生徒の建議により、長崎縣會婦人傍聽の禁を解く。
○大阪梅花女學校、伊豫松山女學校各其新校舍に移轉す。
○三重縣女學講談會、東京婦人衞生會、八王子女工場發起せらる。

●十二月

○皇后陛下は露國皇后陛下より奉呈ありたる親書及び勳章を受けらる。
○有栖川宮御息所等篤志看護婦人會を設立す。
○靜岡女學校新設開校式を舉行す。
●東京麻布英和女學校教師、ラーナ男女學生を集めて交際法を教授す。
○廣島高等女學校開校。
○熊本婦人矯風會、仙臺女子育英會、下野佐野婦人手工講習會、等發起せらる。

兒童の研究

獨逸のプレイヤー。米國のスタンレー、ホール及びペーンス夫人、並びにオスカア、クリスマン氏等ありて、兒童の研究と云ふと、稍や學者社會に重んぜられ、名けて兒童學と特稱するものあるに至りしが、其の行はるると尙ほ廣からず。蓋し、兒童學研究の結果の及す所は、宏大也。其純乎たる科學哲學の上に影響する所も亦甚はだ多かるべきが、就中、兒

發の教育方の上に効驗を賦すると最も大なるべし。

女學雜誌第三百七十三號以下の數號（去年三月發）に、學問界の一新科門として小兒の研究と題する長文あり。同じく、第三百七十六號以下第四百二號に至る迄（去年四月より十月に至る）に、嬰兒の精神及び其發達と題する長文あり。本年に入りて、大日本教育會雜誌に、熊田定治氏の有益なる「小兒の發問」てふ一文あり。教育時論も亦た折節、小兒の心理を論じ且つ奇異なる事實を集めしが、今回、大日本教育會中に設置せられ、兒童研究會なるものは、即はち實地に其研究を四方に勸募せる有益なる一文を公にしたり、如レ下。

兒童研究組合設立の趣旨

教育は人を陶冶するの術なり人を陶冶せんと欲せば先づ人の性を知らざるべからず兒童身心の性情を知悉して始めて能く之を教育するを得べし抑〻心理學の教育學の基礎たり生理學の教育の補翼たる人夙に之れを知れり從うて苟くも教育に從事せんとする者は教育學は勿論心理學生理學共に預め之くを修めざるはなからん然れとも凡て科學の科學たる所は普通抽象的にして特殊具體的ならざるにありこれを將ゐて實地に應用資益せんとせば必ず特殊の事情を斟酌して之れに適合せんことをつとめざるべからず況んや今の心理學なる者は概ね西洋の書籍より直譯傳受したるに過ぎざるなり人情風俗は國土の異なると共に其の趣を異にするは爭ふべからず人情風俗の異なるに由りて兒童心性の狀態竝に發達に多少の差違あるは必然なるとなりとす身体の事も亦然り果して然らば廣く日本の兒童に就きて研究を行ひ以て日本教育の眞基礎を建つるは目下の急務にあらずや

人或は曰ふ者あらん兒童研究の如きは瑣々たる事のみ何んぞ之れを用ひて教育上に資益する所大なりとせんやと是れ過てり請ふ一二の實例に徵して兒童研究の價値如何を證せん某教師あり嘗て小刀、瓶、硯、筆、茄子盤、剪刀、白墨、鉛筆、時計を實物或は標品を以て生徒に示すと二分時にして順次に之れを收め去り後ち生徒をして其の見し所を記臆のまゝ筆述せしめたるに能く筆述する者百中八十六の割なり次ぎにまた犬、松、人、エンピツ、キンギヨ、カラス、寺、米、ムチ、タヌキを實物標品等を用ひずして唯た文字のみを黑板上に大書し生徒に示すと二分時にして順次に拭ひ去りて記臆の儘に筆述せしむると前の如くしたるに能く筆述する者百中七十六人の割なりきと前後成績の良否は實に吾人が教授法上大に注意を喚起すべきとならずや又今度尋常小學校一學年用として假りに撰定したる別紙兒童研究用說話三篇の如き難易相同じからず用ひて廣く試みば或は始めて就學年兒童の理解力を眞に定むるに足るべし特に其の鉛筆山の話に就きて嘗て五六の兒童に商人が盗賊の物を取りたるは善か惡かと試問したる其の答辨の區々にして或は其がまゝにうちすて置かんには復た人の盗む所となれば商人の之れを取り收めたるは善しと云ひ或は盗賊の物を取らば商人も盗賊となるべければ惡しと云ひたるが如き兒童の道德的觀念は大人の未だ假に測り難き者ありとす斯くの如きは固より其の一斑を示すに過ぎず而かも研究功を積まば以て終に能く大は就學の年限教科書の編纂校舍の建築等よりして日常授業管理の事に至るまで一々其の準則とする所を定むるを得るに至るべし

想ふに教育に熱心なる諸君は旣に明細なる觀察調査を行ふて幾多の貴重なる結果を得たる者あらん余輩其の速に筐底を披らきて之れを公にせられんとを望むと切なり然れとも元來此の事の如きは一二人士の獨力を以て容易に成功を期すべからざるは復た疑ひを要せざるとゝす余輩即ち茲に兒童研究組合を組織して廣く全國同志諸君の賛助を需め以て大に爲すあらんとする所以なり諸君常に好機會を利用して各自親炙する兒童に就きて研究調査を行はれ其の材料を余輩の手に送致せらるゝあらば余輩は之れを收集し之れを整理して以て終に其の成績を天下に發表し賴りて我國前途教育の進歩に資益する所あるに至るを期すべし諸君冀くは之れを賛助せられよ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

堀尾金八郎　高島平三郎　後藤牧太　嘉納治五郎
黑田定治　篠田利英　谷本富　松本亦太郎
元良勇次郎

兒童研究用說話（尋常小學校第一學年用）

夏のあつい日に長吉といふ子供が日影で水鐵砲を持つて遊んで居ました、そこへ友達が二人り來て、川へ遊びに行かないかと、さそつた、其の時に長吉は「おつかさんが河へ行つてはいけないと云つたから行かないよ」と云ひました、この長吉の持て居る水鐵砲は川へゆかない代りにお父さんから買つて貰つたのです、それだから長吉は人にさそはれても、ことはつた、すると二人りの友達は「そんならお稻荷樣の森へ行かう」といひました、森ならさしつかへないから長吉も行く氣になつて一しよに出かけましたが、途中で四人りの子供が向ふから來てみんなで七人になりました、其内で一ばん年の多い友さんといふのが「これから川へ行かうさかなをとりにゆこう」といひだしました、あさから來た四人もみんなさかなをすくう笊を持つて居ましたから、とう〳〵川へゆくことになりました、そこでみんな川へ行つてさかなを取つて居ますと、友さんひとりは、はだかになつて泳いでゐましたが、柳の木の下の水の靑くなつて居る所へゆくと、水の中へむぐつてしまつた、みんなは、もう水の上へ出てくるかと思つて見て居ても出て來ない、そこでみんなはおどろいてへんな顏してばら〳〵にげ出した、ほかの子供はみんなうちへ逃げてかへつてお父さんにも、お母さんにも、なんともいはずに、だまつて居ましたが、長吉は中々りこうの子でありますから、内へ逃げて行かないで向ふの方で釣りをして居る人の方へかけて行きながら「友さんが死ぬ、助けておくれ、友さんが死ぬ、はやく來ておくれ」と大キナ聲を出しましたから其人が飛んで來て友さんを助けてくれました、友さんは苦しい目に逢つたけれども助かりました、長吉はおくろ日友さんのお父さんからいろ〳〵の物を貰ひました其の中に大そうよいおもちやの鐵ばうもありました、長吉は此時年は八つでありました、みなさんの内に八つのものはありますか、

注意

一 說話は總て原文の通り講演して一字一句をも變改すべからず

一 說話をなしたる翌日一人々々に就き左の問題を別室又は他生と隔りたる所に於て原文の通りの文言にて問ふべし
　但し一學級の兒童多數なるときは必しも全體に問ふことを要せずと雖も成るべく優等中等劣等の各種の兒童に就て問ふべし

一 說話並に問題の文言にして兒童に了解し難きものあるときは方言に變改するも妨げなし

一 答は必ず兒童の答へたる儘の言語にて左の雛形に倣ひて記載すべし

一 答は其有無正否に拘はらず總て有無の儘に記載すべし決して兒童を誘導して答辭を出さしむるが如きことあるべからず

問　題

第一　昨日は何の話を聞きましたか
第二　長吉がどんな事をした話でしたか
第三　友さんは何ぜ水の中へ沈んだのでありますか
第四　友さんの水へ沈むのを見てみんなの子供はどうしましたか
第五　長吉の外の子供は內へかへつてなぜだまつて居ましたか
第六　こんな時にあなた方はどうしますか
第七　友さんのお父さんはなぜ長吉に色々のものをやりましたか
第八　川へ遊びに行つた子供は何人でしたか
第九　長吉はいくつでありましたか
第十　もし友さんが助からずに死だならどうなるんでせう

答記載雛形

學校所在地名	
兒童男女別	
年齡	
就學後の日數	
優等中等若くは劣等	
父兄職業	

第一答
第二答
第三答
第四答
第五答
第六答
第七答
第八答
第九答
第十答

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒童研究用說話　（尋常小學校第一學年用）

誰か京都といふ所を知つて居ますか、京都は昔天子樣の居らしやる所で中々奇麗な、にぎやかな所です、その京都に昔一人の商人があつた、此商人は大そう蜂がすきで毎日酒を御馳走して始終これを可愛がつて居た、此商人は京都から度々伊勢の國へ商に出かけます、伊勢には何があるか誰か知つて居ますか（大神宮樣があると答ふるものあらば下の如く話すべし然らざれば之を敎ふべし）さうです、大神宮樣があつてにぎやかな所だ、その伊勢へ商にゆく時には此商人は馬を澤山つれて、京都では織物ができるから、縮緬や木綿や又お米なども、どつさりつけて小供にひかせ自分は馬に乘つて行きます、京都から伊勢へゆくには通り道に鈴鹿山といふ山があつて、此山を越さねば行かれませぬ、此商人も伊勢へゆく時毎度此山を通つたが、これ迄一度も泥棒に逢つたことはない、或る年いつもの通り澤山の馬に荷物をつけ小供にひかせて此所を通つた、すると向ふから八十人許りの泥棒が出て來ました、サウシテ商人の荷物をつけた馬の來たのを見て、つかまへて、馬につけたものをみんな取つてしまつた、それから又馬をひいてゐた小供を丸裸にして、其着物を取つた、商人の方は馬に乘つてゐたから、つかまりはしないで山のてつぺんの、泥棒の、どうしても來られない所まで逃げた、泥棒はしかたがないから荷物さへ取ればよしとして、追つかけもしませんでのがしました、そこで商人は山の上から下を見てゐると、泥棒どもは今取つた荷物をひろげて分ケッコをして居ます、さうすると商人が空の方を向いて大きな聲で何か呼ばつたのです、すると少し立つと空に赤い雲が出て來ました、下に居た泥棒どもは驚いて、オヤヘンニ赤い雲が出て來たと思つて居ましたが、これは雲ではなくて、澤山の蜂が雲の樣に集まつて來たのですその何萬疋ともしれない蜂がぶん〳〵と泥棒どもの顏でも手でも、何處といふことなしに、さしてさう〳〵八十人の泥棒をさし殺して仕舞ました、山の上に見てゐた商人はそれから降りて來て、盜まれた物を皆とり返し、その上に泥棒の持つてゐた物までも自分の方へ取つて歸りました、此商人は前から金持でありましたが、なほ〳〵金持になつてエライ商人になつたといふことであります

注意

一 說話は總て原文の通り講演して一字一句をも變改すべからず
一 說話をなしたる翌日一人々々に就き左の問題を別室又は他生と隔りたる所に於て原文の通りの文言にて問ふべし
　但し一學級の兒童多數なるときは必しも全躰に問ふことを要せずと雖も成るべく優等中等劣等の各種の兒童に就て問ふべし
一 說話並に問題の文言にして兒童に了解し難きものあるときは方言に變改するも妨げなし
一 答は必ず兒童の答へたる儘の言語にて左の雛形に倣ひて記載すべし
一 答は其有無正否に拘はらず總て有の儘に記載すべし決して兒童を誘導して答辭を出さしむるが如きことあるべからず

問題

第一　昨日は何の話を聞きましたか
第二　蜂がどうしましたか
第三　なぜ蜂が盜賊を殺しましたか
第四　盜賊の出た山は何と云ふ山でありましたか
第五　なぜ盜賊がそんな山の中に出たのでせうか
第六　商人はなにを持ちて行きましたか
第七　盜賊は幾人程でありましたか
第八　商人はどこの人でどこへ行くのでありましたか
第九　商人は善い人ですか惡い人ですか
第十　商人は後にどうなりましたか
第十一　商人が盜賊の物を取つたのは善いことですか惡いことですか

答記載雛形

學校所在地名		兒童男女別	年齡	就學の日數		優等中等若くは劣等		父兄職業	

第一答
第二答
第三答
第四答
第五答
第六答
第七答
第八答
第九答
第十答
第十一答

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒童研究用說話　（尋常小學校第一學年用）

一本話に入る前に豫備の問答により實物、標本又は圖畫を以て充分に鷺の觀念を得しむべし

一左に記載したるは女子高等師範學校附屬小學尋常第一學年の兒童に就きて試みたる豫備問答なれば參考の爲茲に附記す

一豫備の問答は翌日問ふべき問題の答辭中に含まるべき事項に全く關係あらしむべからず

豫備問答例

（教師問）此處にある鳥は（卓上に置きたる剝製の鷺を指し）皆さん何だか知て居ますか（四五人擧手）平井さん

（兒童答）鷺でございます

（問）此鳥の嘴はどんな形ですか（四五人擧手）菊池さん

（答）長くつて尖つて居ます

（問）然うです、細長くて尖つて居ますねえ、足はどうでございますか、菊池さん、有賀さん、瓜生さん

（答）長いので御座います

（問）然うです、足も長く嘴も長いソーシテ鷺は皆斯う白いもので御座いませうか（數生擧手）一柳さん、板倉さん

（答）後部の方が一寸黑くなつてゐるのもあります

（問）斯う云ふ白い鷺の事を何と申します、秋山さん

（答）白鷺で御座います

（問）白いから白鷺ですモウ少し鼠色をしてゐるのもあります併し其れは滅多に無いこういふ鳥の活きてゐるのを見た人が御座いますか、河邊さん、安藤さん、ドウです

（答）夏涼んでゐたら白鷺が飛んでゐました（數生擧手）

（問）鹽田さん、牧山さん

（答）動物園で見ました

（問）岩崎さん、長谷川さん、菊池さん何處で見ました

（答）遠くの方の景色の宜い處にゐました（一生擧手）

（問）一柳さん

（答）白鷺が飛んでゐました

（問）宜しい白鷺は飛んでゐる事もあり、又は動物園抔では池の水の淺い處や水際の邊を渡つて居る物です其れから山抔に遊んでゐる事もあります、ドンナ物を食べるでせう（二生擧手）牧山さん、河村さん

（答）鮒だの何かを食べてゐます

（問）然うです、小さい魚抔を食べます、此の鷺に就て大變に面白いお話があるから今日は其お話をして上げます

（生徒）私宅にも白鷺が居ます

（問）大澤さん、お宅にも畜つてありますか宜しい今面白いお話をして上げますからよく聽て記憶て居なくてはいけませぬ

說　話

或處に三郎と云ふ男の子が居まして、何時か其家の裏の竹藪の所に往つて遊んでゐました。其竹藪は大變に廣いのです、ソウシテ其中には鷺の巢が幾らもあつたのです。其巢の中には雛のドッサリ居るのも、少し居るのもありました。三郎は竹藪の中を歩るきながら、ヒョット雛が巢から落ちてはゐまいかと思つて暫らく探して居りました。スルト側の草の中からヒョト飛び出したから、何だらうと思つて見ると鷺の雛でした、雛だから羽がよく伸びてゐないので飛べませぬ。ソーシテ片足跛です。其れで人が來たから逃げて行かうとする所でした。三郎は直ぐ其れを捕へ、嬉しがつて、大喜びで家に持つて歸つて種々餌を遣つたりして可愛がつて一生懸命になつて育てゝ居ました。所が初めは怖がつて逃げましたけれ共漸々經つ中に。三郎が虐めずに餌を遣つたり可愛がつたりするのに馴れて鷺の雛が後には逃げなくなつて、仕舞ひの頃は三郎が學校

に行くと續いて來るやうになりました。其から又學校から歸ると一番に鷺の雛がお迎ひに出て來ます、其樣に何時も中よく遊んでゐたのです。所が雛は段々大きくなり前には短かかつた羽も伸びて來る、跛の足も直つて仕舞つたから何處でも勝手に飛んで歩く事が出來る樣になつたのです。鳥杯は出て遊ぶのが好きだから。三郎の家では其鷺を籠に入れて置かないから夜が明ると、三郎が學校に行く、其れと同時に鷺も山に往つたり、水の邊に往つたりして方々飛んで廻つて遊ぶのです。其れでも夕方になると屹度歸つて、三郎の家に來てゐたのです。所が其後になつて、三郎が從來の家をやめ他所に移轉したのです、スルと鷺も家が分らなくなつて仕舞つたから其れ限り何處かへ飛んで往つて仕舞つて、トウゝゝ歸らぬ樣になりました。

注意

一說話は總て原文の通り講演して一字一句をも變改すべからす

一說話をなしたる翌日一人々々に就き左の問題を別室又は他生と隔りたる所に於て原文の通りの文辭にて問ふべし

但し一學級の兒童多數なるときは必しも全體に問ふことを要せすと雖も成るべく優等中等劣等の各種の兒童に就て問ふべし

一說話並に問題の文辭にして兒童に了解し難きもののあるときは方言に變改するも妨げなし

一答は必す兒童の答へたる儘の言語にて左の雛形に倣ひて記載すべし

一答は其有無正否に拘はらす總て有の儘に記載すべし決して兒童を誘導して答辭を出さしむるが如きことあるべからす

問題

第一　昨日は何のお話を聞きましたか

第二　鷺の巢はどんな所にありますか

第三　三郎の捕へた鷺の足はどんなでありましたか

第四　鷺の足はなぜびつこでありましたらうか

第五　鷺の雛はなぜ三郎になれたでありませうか

第六　此の雛が初めて山や川へ自由に行かれるやうになつた時はどんな心もちがしましたらうか

第七　雛の落ちて居るのを見附けた時にはどうしますか

答記載雛形

	學校所在地名	兒童男女別	年齢	就學後の日數	優等中等若くは劣等	父兄職業
第一答						
第二答						
第三答						
第四答						
第五答						
第六答						
第七答						

○「史海」の神功皇后

久米邦武氏、意氣例の如く軒昂、此頃ろ筆を神功皇后と則天武后とに着け、大に其の面目を露拔せんとす。其の完結を待ちて徐むろに一評を寄せん哉。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

短歌國粹の辨

短歌は辭ば短かきゆゑに意ろ亦短かし、長歌は辭ば長きゆゑに意ろ亦長し。今後、人の詩想複雜し、歌よむこゝろも昔しの如く、平淡簡易にて事足るべくもあらねば、隨がひて、長歌こそ適すべけれ、短歌を用ゐて將來の複雜雄大なる思念をよみ露はさんとは難かるべけれ。故に今より以後の詩形は、長歌なるべし、短歌は追々に廢れゆくべし」と論ずるもの、近來に至つて彌よ多し、是れ極めて明白なる意見の如けれど、實は思はざるの甚しきもの也。左るを況んや、此の論あるによつての故に、未だ左程に複雜雄大にもあらぬ詩想を、忽まち長歌によりて詠み出でんとする、愚の更に甚しきあるをや、愚の甚しきは、寧ろ憫れむべし。之によりて、處女的詩想を散漫にし、年少才士が歌袋を輕薄にせんとするに至つては、大に慨歎せざる可らず。

辭長即意長とは、西洋人士の言へるとにて、東洋的趣味の容易に承認する所ろにあらず。多辯にして悉く開放露白するは、彼の習慣にて、寡言、含蓄、むしろ、默せんとして僅かに熱思をほのめかす所ろ、即はち我の特色なり。喩へば、春花咲き、爛熳紅白四方に相映じて、天地底意なく懷ひを露はしたるは、彼の尤とも樂しむ所。秋、黃ばみ、葉さび、晩菊少しく微笑して、虫吟、其の感歎を訴たふるなどは、我の好んで佳なりとする所ろ。東西の趣味、元と自から同じきを得ざる也。

左れば、東洋的特色を示せる此の異樣の趣味は、繪畫、音樂、彫刻、文章などの上に等しく顯はれて、何れも、其の西洋風なるものと相合はざる所ろあり。然るに、美術、修辭などを論ずるもの、兎角に西國學士の所說に心醉し、一概に彼の論法を用ゐて直ちに我の特色を毀らんとす。これ、誤謬多きゆゑん也。夫れ、審美學上の論評の元素は、一に趣味に依る。然るに、趣味にして元と東西相同じからざるの事實を顧みず、直ちに西國の趣味を基礎としたる西國の論評を擧げて、東洋の所作を是非せんとす。其の着〻當を失するは、免かる可か

らざる事なり。

故に、詩歌の長短を論ぜんとするものも、亦た此の一要義に鑑みるとなければ、必らずや誤まらん。東洋的詩歌の感情の極致は、情極まつて默する所ろにあり。何んぞ必らずしも滔々として數万言を羅列する所ろにあらんや。極致は、默するにあり、默するの次は、寡語にあり。情切まり、感溢れ、唇頭意はず顫ひて敢て數言を下すの躰、即はち、其の詩歌的發露の自然の情形なり。カーライル曰く、人、何故に歌ふとを爲す、感切にして尙ほ能く歌ふとを爲すの餘裕ある歟と。カーライルの罵る所は、西洋人を罵しれる也。渠をして若し日東の歌人が三句、五節の短かき辭ばに、天地鬼神を感動せしむべき至誠の調べを歌ふを聞かしめば、呼んでまさに言はんとす、是れ也、是れ也と。

曰く、玄默。此の趣味の如何に幽邃にして、而も、其辭意の如何に長遠なるや。東洋の美術、美文は、すべて此の趣味を存す。故に、最上の理想は、默するにあり。默するとを破つて而して大いに動くときや、曰く、喝と。喝は一短語なり。而も、其の意の長きは、如何に長文をもて辯じ盡すよりも尙ほ長し。短歌の短かき所以、幾分此邊の趣味を存するによれり。

此故に、万葉時代に長歌多く、古今時代にも亦た長歌なきにあらざりしが、多くは、適種生存の競爭に破れ、若くは、世人に忘却せられたり。就中、佛教の感化を蒙むるに及んで、彌よ長歌を滅じたり。抑そも、從來、短歌のみ多く行はれたるは、一に、其適種たるとを證し、二に、其の感化によりて彌よ東洋的詩歌の特色を涵養したるとを示す。而して、偶たま、短歌の其の精神を失なひて之が改革の唱道せらるる時や、常に長歌たるとに改ためられずして、寧ろ、彌よ其の短を增す方に進められたり。見よ、發句俳諧の隆んに起りたるは、短歌が、其の三十一文字をすら過長なりとせらるるに至りたる結果にあらずや。詩歌の革新は、其の形式に流るるを防ぎて、其の精神に反らするにあり。而して、東洋的詩歌の其の精神に返るなるものは、大寧ね、其辭ばを短かくするの方針にある也。

特色斯の如し、趣味斯の如し、歴史亦斯の如し。之を如何んぞ、直ちに無雜作に長歌を以て優れたるものとなさんとする

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

乎。惟ふに、東洋的詩歌の特色のつゞかん限り及び其の存在せん程は、其詩形は長にあらずして、寧ろ短なるにあらん。短歌、發句は、決して廢るべきものにあらず。

左らば、長歌は、將來、發達することなき乎と問はんに、固より否と答ふべし。今後の東洋は、純平たる東洋にあらず。其趣味、特色も、大いに調和變易せん、もしくは、調和變易したるものが混同共通することあらん。隨がひては、之を詠たふべき詩歌的趣味にも亦た多少の變化ありて、延いて其の詩形にも影響する所ろあらんとは、固より免かる可らざるの數なり。

但だ記臆すべきは、詩形を變ずべき者は、詩想の長短如何んに拘はることは少なくして、趣味の變化に伴ふことの多きこと一つ也。故に詩形は、自からに變ずべし、俄に變ずるものにあらず、况んや、議論などによりて變ずるものにあらずと言ふこと二つ也。

ひとり惜しむべきは、年少初發の詩才、漫に形式論に惑ひて、初めより、長歌を歌はんとし、其詩想を集中凝結せしめずして、反つて散漫粗奔せしめ、精を水に混じ、神を波に流し、歌ふて彌よ長からんとして、縱漫彌よ增し、遂に其の詩才を鈍ならしめんとする人の多きことを。見よ、近年長歌多し、左れど、よく古人の短歌の意よりも長き意を歌ひ、古人の短歌の鬱勃よりも鬱勃せる複雜をよみ出でたるもの、幾何かある、辭ばいよ〳〵長うして意ろの彌よ減じゆくを見る、是れ豈に長歌を歌はざる可らざるの所以と言ふことを得んや。

演藝論

小此木信一郎

敢て演藝といふ、意義通ぜざるの憾あり、今玆に演藝といへる言葉の範圍は落語、講談、淨瑠理、其他くさ〳〵の音曲技藝等、所謂寄席といへる一小世界に行はれ、普く平民社會に向つて娯樂を與ふるものをいふ、劇界の事は此以外にありとするの本意を斷りおかざるべからず、演劇改良といへる語は今にはじめぬことなり、斯語、突として一世を傾倒するや天魔火を吹くが如く年少氣鋭、革新の焔、炎々たるの折柄、猛然として其根底をさへ覆へさむとし、而も一進一退遂に氣沮み

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

力竭き呼べども答へず叫べども應ぜず前途茫々夢より夢を辿るに左も似たりき、之れと相伴隨したる演藝改良の叫聲高く天邊に響き渡りしも今や則ち其跡の尋ぬべきだに無からむとす、所謂社會の指導者は視て以て相關せざるものゝ如く殆ど一人の言茲に及ぶものあるを見ざるに至りぬ、先きの叫聲果して何の故ぞ今の沈默將た何の思ふところぞ、

人一ト度行きて夕に街頭に漫歩せよ、こゝかしこ四角安燈墨黑々と演藝者の名を署し、叫び盛勇ましく客を招くの景況に接せむ、試に銅錢幾箇を投じて斯別天地に入らは數百の老幼男女は相集ひて耳を傾け目を欹て演藝者が逐次に演ずる數番の落語、講談、音曲に魅されて泣くもあらむ笑ふもあらむ、此の如きもの四時に斷間なく夜々に相接す、而して斯道に衣食する演藝者都下幾百を以て數ふべし、聽觀の客は蟻の甘きにつくが如く一夕の歡をこの小樂園につくして、以て鬱情を散ぜむとするものを一々に計らは夥しき額にや上ぼらむ、茲に集ふ平民社會は別けても都下の平民社會は果して何事をか學び何等の感化を得るとするぞ、熱閙煩雜の巷に餬飴し春時櫻を眺め秋候菊を賞するといふも、自然に觸れて其感を動すと稀れなるの地位にあり、若し往々野にさすらひ水に浮ぶも畢竟幽遠の天地に其想を漾蕩せしむるの素養なく、絃歌美酒を缺かば秋月春花も面白からじとの情と、其情をして益々盛ならしむるの境遇と機會とを附與せられたる社會は、團菊左の芝居か左なくば義太夫、落語に頼りて只管其情を慰さめ娛樂を充さむとするも理ならずや。

實に寄席は斯社會に最も恰好したる小倶樂部なり、無聊慰むべく憂悶拂ふべく倦怠醫すべく彼等はこれによりて史談を聞き音樂を學び智を廣め情を充す、夢にだも知りがたき幾多の時代に導かれ、幾多の豪傑、勇士、忠臣、義士と相語り、或は輕妙の口調に其四肢を撚はして抱腹絶倒し、或は一昂一低の曲調樂聲に誘惑せられて吾はこれ天上をさまよふかと疑ふ、此間に於ける感化の此輩に及ぼす勢力を念ずれば事實に於て極めて驚くべきものあるを知り而もまた極めて危險なるを想起せずむばあらず、彼の社會的方面に意を注ぐの人こゝに思ひ至らむか、これを放任するの心無き業にして、善用するとの、いと切實なるを感ぜずむばあらず、若し夫れ彼の演劇の改良を企てむとして、極端の理想を千古

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に走せ一躍以て彼美妙の境地に臻らんと欲せむか、其言愈高くして其實則ち全く空に期し去らむのみ、演藝豈に獨り然らずとせむや、平民社會唯一の樂園として春宵秋夜絶大なる娯樂と感化とを溢らすを思はゞ社會經綸家が其講究觀察をなすと最も緊要なると共に、改善刷新の法を講ずるに當つて最も社會的觀察を併有するの要を見む、

人に情あり人生娯樂無かるべからず、詩に依つて歌に依つて畫に依て樂に依つて人はこの乾燥無情の社會を去つて蜜乳よりも甘き珠玉よりも美しき樂園に遊ぶを得む也、

然れども盲者は以て繪畫を見得べからず、聾者は以て絃管を弄ぶに堪へず、漁翁詩を解せず樵夫歌を詠ずべきの理なし、高妙の美術を味ふ資格なきの輩は、果して娯樂無きも可なるか否らず彼等は已に恰好したる娯樂を求めて以て自ら其情を充さむとす、斯の如きの輩則ち欲するところに娯み行かむとするところに樂しましめて可なるか、

寄席といへる一小倶樂部に於て間斷なく興行する演藝は淵源已に久し、都下の平民社會と離るべからざるの關係を有せり、而して絶大なる感化と娯樂とを與へつゝあり、これを助長するは則ち平民社會の娯樂を助長せしむる所以なり、之れを刷新するは則ち平民社會の娯樂を改善せしむる所以なり然らば方今如何の弊所を刷洗し如何なる方嚮に進捗せしむべき乎、之を改善刷新せんとす、先づ演藝の舊組織を改むると則ち其第一位にあらむ、思ふに今の所謂演藝は舊時代の遺物なり、其趣味、其本領、將た其躰形、一として德川の昔を想見せしめざるはなし落語に於ける講談に於ける淨瑠璃に於ける乃至其他の音曲に於ける身振り、口音は更にもいはず、其精神は依然舊に依つて舊のまゝなり、嘗て我氣運は逸早くも之を改善せむと欲し、一二の講談者は改良の先鋒を以て自任し今も尙ほ自任しつゝあり、一二の新作淨瑠璃はより〳〵三絃に上りて談られたるものあらむ、新文學字の作物稀には口演せられたるもあらむ、才子が時のすさみの都々一端唄は往々謌はれつゝあるならむ、多少の學才ある書生が斯道に入りぬる話も聞けり、洋人某がこの連に入りて其日本裝の珍らしさと口調のをかしさとに一夕の歡を操つりしとさへありと聞きぬ然れども之れ、なほ演劇界の革新が覺束なきと均しく、少かに其躰面を糊塗して當世の風潮に、乗ぜむと欲せしに外ならず

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

其全部分に至つては則ち舊の夢をくり返へすに過ぎず、今や帝國の面目全く新ならむとす、然も其娛樂、嗜好、感情、風俗、思想等は則ち過渡の時代に遭遇せり、舊を固守するは遂に新に添ふ所以にあらず、然れども一打擊を下し來つて、其根底を覆さむとするは無謀の策といはざるべからず、去れば演藝の改革も又此段の用意を要す、故に先づ舊精神を破らむとに急なるよりも、寧ろ新思想、新智識、新趣味を注入するに專念すべし、演藝家を敎訓すると、新演藝家を作ると、文壇の才子が其作物を演ぜしむると、新文明の智識を調和すると等、最も其方途を開拓するの手段ならむ、凡て杓子定規を以て此世の中の萬端の事柄を律するの愚は云はずとものとなれども彼寄席といへる小世界當時の有樣が如何に賤しむべく、猥らがはしき笑語を弄して、聽客の感を惹きつゝあるかは實に意料の外にあるを嘆ぜずむばあらず、これ一世の風敎が混亂、腐汚を極むの反應たるには相違なけれど、あまりと云へば不始末千萬の義にはあらずや、風紀警察の手は、果して如何なる程度まで行き屆くものなるかは、玆に論はむとする限りあらねど、都下多數の庶民が唯一の娛樂場として無量の感化を享受せられつゝある公開の倶樂部に於て、擅に聽客の好意を得むが爲めに、猥りがはしき語を弄しつゝあるに拘らず、覥然知らざるものゝ如きは果して何の心ぞや、要するに舊組織を改善せんとすれば新趣味を注入して以て渾然融和せしめざるべからず、固陋卑猥の言語唱歌を弄び、陰々裡に社會に荼毒を流すに至つては一面演藝者の品位を高からしめ、一面風紀警察の監督を要す、若し斯の如くして卑猥の他別に一段の快樂なる天地あるを知らしめ、聽客をして恍々乎として稀にあらざる歌にあらざる美妙快濶にして、而かも平易明暢なる別乾坤に遊ばしめむか、其功德豈に偉大ならずとせむや、

新趣味を注入するといふことは易くして行ふは難し、過渡の時代、新舊分子迭いに顯然として其圭角、相消磨せざるに當つてや、これを藝術の上に調和せしめむとして、失敗を招くと理りなり、演劇に於て人嘗て其然る所以を見聞したらむ、演藝また然り、阿古屋琴責に擬したる花井梅の新作淨瑠璃等を聽もの果して何の感ありしか、講談の二三子已に荐りに明治の事蹟を演ず、而も模するところ屢々極端より極端に走り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

終に其眞を去る遠くして、調和せざる節々耳に障り聽く者をしてぎごちなく感ぜしむるもの一二に止らず、新を競ふ二三の輩未だ全く聽客の意を充すに足らざる斯の如し、玆に於てか舊習に染みて出づるところを知らざるの徒は、斯道僅少の名人を除くの外、大約陳々腐々相依りて以て一塲の笑を博し一時を彌縫し去るのみ、當今斯道の趣味貧しきこと一に何ぞここに至るや、落語といひ講談といひ淨瑠理といひ些の變化なく些の新案なく、演藝の徒則ち以て自ら得たりとなす、聽くもの敢て是をあやしまざるを思へばなり、星霜を閲するに從ひ其妙光を煥發するが如きの品なれば、左るとながら、終に少かだも新趣味を吸入するの能力なきに至りては、斯道の前途も遂に思ふべきかな、聽客の趣味賤しきは憐れむべしと雖も、其厭かざるの習は果して何處より得來りしぞ、

今や小説の不健全を説くものは是れ有り、風敎の萎微を慨するものは是れ有り裸躰畫の取締、脚本の撿閲 某 翻刻古書發賣の禁止等、警察の眼、鋭ならずとせず、家庭敎育、國民敎育、倫理主張、一世の潮勢、前途慶すべしと雖も、庶民と密切の關係ある演藝を放擲するは果して何が故ぞ、改良の歩武劇界に蹶りて、遂に一歩を斯の小樂園に轉する餘地なきなるか、

これを改善するは則ち平民社會の娯樂を充し、これをして淸からしめ美しからしむる所以なり、文士一臂の力を借してこの貧しく古くさき風趣を一洗し、新思想新智識を注入し、融和せしめむか、其感化の及ぶところ豈に豫め計るべけむや、而して其娯樂を害はざる限りに於て、社會道德の敎訓を抱合せしむるが如き、達士が最も考察すべき當今の緊要問題ならずとせむや、

俳諧雜記

知十坊

新題目　耶蘇祭

俳題中に新に一を加ふるを得ば其人の手柄は沒すべからずふるき俳諧の季よせ春の部に「繪踏」の目ありこれは長崎などにて毎年二三月の候切支丹宗改めのため耶蘇の繪像をふませし例なりと註せり興もなきかたよりし題なればにや元祿天明の大家にも此發句の作例となるべきはいと稀れなり但し聯句

には之を採らば必らずあるべきかなれど今座右の書をさぐりて之を求むるの暇なし近世一具の句に絵踏と松風とを取合せし句面白しと思ひしが今又全句を忘れたり

今の老鼠永機新に季よせを選み「俳諧獨歩行」を上梓するやこの古題目「絵踏」の目をけづり換るに冬季十二月の部に「耶蘇祭」の目を加へたり舊習を墨守し勝なる舊俳諧者流にありては其季よせに基督降誕節を加へたるは感賞すべきもの俳壇の一佳話として傳ふべきものなり

さて又之を聯句のうへに論ずる時は神祇釋教いづれにとるべき素より釋教に屬すべきはいはれなければ神祇に屬すべきは勿論なれどわれはいまだ此事につき永機に質せし事あらねば永機の意之を如何に用ふるかは明かならず

神祇釋教の目を廢して共に「宗教」なる目の下に此類を合する方便宜なるべしと思へりこれ等は所謂專門俳家の論ずべきところ余の如き書生俳諧者流にありては聯句をなすにもこの邊は至て自由に至て寛大に處分するつもりなり

さて「耶蘇祭」の題目新たに選れしも未だ之が句あるを聞かず兩三年前青山にありし頃恰も此節會の候に際して南喧に背をあたため此題を採りて口より發するがまゝ懐紙にとゞめしもの忽ち數章を得し事ありて友人蒼梧簑笠兩君もまた各數章を贈られし事ありき而して今共に其稿を存せず簑笠君は「厩」を材とし「さゝなき」を題としたり下五字は忘れしがたしか「さゝなきの厩に來たり」といふ句意なりしと覺ゆ、蒼梧君は「耶蘇祭」を題とし之に子供の「赤足袋」を材とせしがいかにも耶蘇祭めきてをかしかりしが惜むべし全句を忘却しぬ余の句は「星」「横文の手紙」「紅巾」などを材としたる駄句數首ありしなかに

いえす祭り絵踏のむかしばなしかな

の一句を記す

猶記す一句「世の人の知らぬ師走の祭かな」といへるを作りしが已にして古類題を閲みせしに

日出たくも見ゆる師走の樂器かな　保吉

の句ありき保吉は天明年間の作家にして此句は曾て某邸に伺候せし時の句なりと師走のさわがしき中樂器に思ひよせし優雅は頗る美し而してこの句を「耶蘇祭」に用ゐなば彼の世人が奔々走々の間一年の中燭紅花の如く群見洋琴に和してう

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たふ和氣洋々勞苦の人をして亦た其心神を安慰せしむるものあるの狀をうつせしものとし見るべきを覺ゆ余はこの古句をとりて「耶蘇祭」の句を定むるを佳なりとす

已にして之を戸川殘花君に談ず君亦句あり左に志るす

ベスレヘムの曉を思ひて　　殘花

馬槽の寒さを志るや耶蘇祭

夜の霜をふみてから志る恩寵哉

余もまた一句あり

耶蘇祭紅毛の老爺謠ひけり

露骨の甚しきものなれど近頃めきし調なるべしとて拙自ら知りつゝ記し置くなり

秋聲會　女姓の發句

秋聲會の消息は「毎日」「讀賣」「國民」に「俳諧ひともし頃」と題せし記にほの見ゆ改めてこの誌上に詳録するは他日にゆづるべし

一事この誌上に紹介すべき事ありこの會に於ける女姓の發句なり

隙さうに椽に腰かける小春かな　榮子

山越しや姉と妹の大根引　同

思ふやうに冠れぬ風の頭巾かな　信子

焚て居るなかへ吹こむ落葉かな　同

冬木立氣味わるき迄月のてる　千枝子

埋火を下手にたやして仕舞けり　同

いたづらをして胼きらす弟かな　四三子

淋しさを笑ひ出しけり歸り花　同

榮子は角田竹冷夫人、信子は島田烏山夫人、千枝子と四三子とは共に角田氏の令孃なり、秋色千代が時代も再びまさに俳壇に起らんとするの色ありといふべし

舊派の女俳家には探花女ある事は曾ていへり之を外にしては花朝女といへる老女ありて人品極めて溫雅なりと聞及べり

歲旦と子供

昔日より節句は家庭の一樂事なり家庭の一樂事には小兒其主たるべしされば俳人が歲旦等を咏ずるに於ては小兒をその材に用ふもの割合に多し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今朝の春母の乳房を拜みけり　勝台
初春や常はよき子もほしからず　同
蓬萊に南無〳〵といふ子供かな　一茶
叱すぐに棒ひく君が筆はしめ　都雀
ふり〳〵やあるは添乳の枕かも　重厚

猶多けれど煩はしければはぶく「所謂耶蘇祭」なる題目が世普及するに及ばゝ子供の俳句はまたこの題目の專領するところなるべし

新刊書

○明治評論　第一號　鷗村

夙に政論壇上一頭地を抽んでつゝありし「精神」雜誌は、今や「明治評論」と改題せられて、更に層一層の氣焔を吐かんとす。本月一日其第一號發兌に接して、之を見るに、其編輯の體裁、材料の選擇等大に整ひ、頗る良好の雜誌となれり、近衛公爵の「朝鮮野蠻」、香汀散史の「伊東巳代治」等讀むべし。此雜誌毎月一回一日發兌、一册定價金九錢、麴町區平河町一丁目六番地精神社發行なり。

○日本の家庭　第一號

東京專門學校校友一派の人々が發行するよしなる「日本の家庭」は本月一日其第一號出づ。其旨とする處は平易なる文字を用ゐて、家庭を治め、家庭の快樂を增進せしめんとするにあるよし。初號の事故未だ整はぬ節多かれど、追々進歩して、斯道の爲に益を謀するに力められんとす。該誌毎月一回一日發兌定價一册六錢五厘、麴町區富士見町二丁目六十七番地日本の家庭社發行なり。

○阿秋
夏祓ひ　春陽堂版

『阿秋』は東京日々新聞の遠柿園主人が、曾て其紙上に『出征の留守』と題して連載せし、一箇の小說が再度の御勤めをなして顯れ出でしものなり。阿秋は素是れ一個可憐なる貧家の女、許夫が出征の留守、節を守りて、無慈悲の繼母に苦しめらる、その物語りや可哀悲慘、婦女子をして淚を催さしむるに足るものあり。然し文學上の價値よりいはゞ、如何なるものにや評者は不知。『夏祓ひ』は石橋忍月子の短篇作、若殿樣、納取曹、冥途通信等の三四篇を一括す。霜月の出版初に『夏祓ひ』の名ある、何んだか其表題丈け聞いても、なかしな感じがせらるゝに、また三四篇の文字が一々ざれ丈の妙趣があるものやら解し難し。之を讀んで竊に憂ふ、曩には文壇の一方に雄峙するが如く見えし忍月居士も、今は既に老退し了りたるには非らざるかと。

○ヘルバルトに關する攻究　普及社發兌

此書は中島半次郎氏が、曾て教育時論誌上に出でたる、中島博士の「ヘルバルトの哲學」、谷本富氏の「ヘルバルトの教育學に關する謬見を駁す」、三春生の「ヘルバルト派の教育學を論す」、及び教育時論社說の「ヘルバルトの教育學を論す」、等にフエルキン氏が「ヘルバルトの教育原理」、「維新以後教育學風の變遷」、「ヘルバルトの哲學史上と教育學史上とに於ける位地」等を加へたるものにして、ヘルバルト派の教育學は如何なる性質のものなりやを手短に知らんとするには尤も便利有益の書なり。定價一册金廿五錢。

○閨秀小說　博文館發兌

文藝倶樂部第十二編臨時增刊として「閨秀小說」出づ。これ明治の才女淸女が、一

堂に會して、才を競ひ、智を闘はすものなり。卷頭七女文士の肖像は、初めて盛容に接して、益々其才を慕はしむるの感あり。三秀才の筆蹟、六女史の歯、いづれも感嘆に堪へざるの思ひあり。花圃女史の『萩桔梗』も文字例によりて婉、若松賤子の『忘れ形見』これ女史が傑作の一として世に公評あるもの。樋口一葉女史の『十三夜』情こまやかに哀れなり。其他北田薄氷女史の『黒眼鏡』、小金井喜美子の『名誉夫人』、大塚楠緒女の『暮ゆく秋』、伊藤響花女の『村時雨』、ゆかり女の『片時雨』、田澤稲舟女史の『しろばら』、藤島雪子の『手箱の内』、石榑わか子の『刷毛彩色』、なつ子の『やみ夜』、及び才媛數名の新躰歌を載す、皆讀むべし。殊に大塚楠緒女以下に至りては、是迄芳名を聞くと稀れなりしにも拘らず、其作を取りて之を讀むに、文才大に驚くべく、後世恐るべきものあり、就中評者の尤も驚くに堪へたるものは、稲舟女史が『しろばら』なり。其趣搆は素より拙劣なりと雖も、文字の間に稍老熟の色見え、而も大膽にも藝者浮野郎の痴態を畫き、なほ甚だしきは、篇末の醜を寫すに勇なるなど、殊に其女子を描くに、毫も女性作者の眼光を以てせずして、全く男子而も女子の微情を曉ると淺き男子の見解を以てするなど、彼卷頭の肖像中に見えたるが如き、芳紀十六七の處女にしてなほこの才ありと思へば、豈に何ぞ驚かざるを得んや。且や女性作家によりて、如斯き不健全なる文字の弄ばれざらんとは實に長大息に堪へざるなり。

爛　煥

佳人（譯）

杜　子　美
森　愛　軒

（一）

むかしやんごとなきあたりに生れたまひし絶代の佳人おはしますよし村人ども日毎にのゝしりあひき。

（二）

日向の國の遠山里に見る影もなき菴をむすびつゝ朝夕の讀經さへもおこたり玉はず、行ひすまし玉ふよしたれいふとなく傳はりぬ。さはれ此佳人のありしむかし聞かばや。

（三）

帝は御いたはしや壇の浦波の泡とはかなくきへ玉ひ、あはれ一世の花とうたはれたる平家の一門は、あへなくも打かへす一ト濤の夕嵐にうたてやうろくずの餌となりはてき。かの佳人のはらからも めざましきはたらきしてあひはてけると

かや。官位のいかに尊くともなどてたのみとなるべき、年月めでつめでられし親兄弟が骨肉をさへ敗むる事あたはざりけるものを。

（四）

盛りなるをのみ見て、衰ふるを悪むは世の中の人のつねぞかし。さればかの佳人の身の上、今は烟の影うつりてめぐるが如く、昨日あきらかなりしあたり、今日はおそろしき闇とはなれりき。かの人のまだ盛りなりしをりは忠實かにつかへたりし郎黨どももかく暗くなりはてゝは昔し明るかりしとも忘れてかの人の影だに踏むものもなく、あまつさへ偕老のちぎり末あさからじとちかひし最愛の夫すら、おそろしや源氏の軍に武士の兜ぬぎてはせ加はりつ、今はそれがしが娘娶りて戯れくらすよし。あなやめうと葉は相抱きて枝を守りをしどりは獨り寒潮にやどらずとかや。只新しき人の笑はんをのみ此上なき樂と思ひ、そがためにはさきの妻の哭き悲むをもかへりて面白き事のやうに思ひなす人の心のあさましき。

（五）

岩間もるたにのきよけれど、ながれないでぞ濁りやすらん。

（六）

されど年頃なれ從へる一人のはしためのみぞ、見る影もなきいほりにかしづきはべりける。大かたはのこりすくなになりつる寶物なん村に鬻ぎて日毎のかてを得つ、綾の衣もて稲を覆へど、それさへに雨風を凌ぎかねたるぞ覺束なき。さはれ世をすてつ世にすてられし身の、めづらしき花どもとりいでゝ髮にはさむ事やはある、飢ては木の實を食ひ、かはきては柏の枯葉に水を掬ぶ。秋風さむくつゝれをさし、光かよわき入相の陽、影細長く門邊にまげる村竹をいりくるをり〳〵柴折戸によりそひて物思はしげにかなたこなたうみながめやるあはれその様、幽魂はた何處をかさまよふらん。（をはり）

佳人の四季

天仙子

春

ふさふさと垂るゝ前髮を風に亂して、庭園にかけ出でたる少女、玉の如き黄鳥の初音に歩みをとゞめ、眞紅のリボンにて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

結べる束髪を動かして、梅が枝を何處とさし覗きつ。それと知りけむ、ホー法華經の聲を殘して飛びたつ途端に、チラと散る花一片二片、そを、紫の袚風の袖かろく翻へし、紅葉の手さしあげて捕へむとする無邪氣さ。

夏

つり葱の葉さへゆらがぬ今日のあつさを、行水に流して白ちゞみの浴衣をはおり、雪の腕にやをら團扇を把りあげ、微かに風をまねく其の袂に、烟草盆のかげより不意に小猫のとびつくを、びつくりしてふりかへりつ、ほゝ笑める眼の涼しさ。

秋

夫の餘念なく書を讀める、黒檀の机のかたはらに、眉落さぬ丸髷の婦人、『貴郎』と呼べど答なく、二度三度、呼べど答なし。をりしも秋風のサッと燈を吹き滅せば、蒼天より落つる滿月の麗らかなる光りに、『それ御覽あそばせ』とさゝやく紅の唇、春の花よりもあざやかなり。

冬

『かあちやん坊は好い子ヨ』、はゝは裁縫の針をとゞめつ、炬燵に可愛らしき枕せる稚童の顔を凝然とながむれば、如何なる夢におそはれてや、莞爾として復たすやすやと眠れる無心の美くしさ、その頬に接吻し、やがて、針箱の抽斗より鏡を執りいでゝわが顔を寫しぬ。

樹だま集

泡鳴子

などりの南天

三とせ　このかた　わがむね　に
ひとしほ　深かき　こひ人　の
世　にも　やさしき　おもかげ　は
この　おくつき　に　うづもれて。

かしら　の　かた　に　立つ　いし　の
いく夜　の　あめ　に　うたれて　や、
しめりがちなる　その根　をば
みどり　の　こけ　は　おほへども、

あはれ、ゆかしき　さをしか　の
みゝ　ふり立てゝ　きゝまさば、
いまも　かはらぬ　わがこゑ　の
かすか　ながらも　通じてむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よしや　くち　には　えいはねど、
わが　かなしみ　の　ひとふし　も、
はかなき　こひ　を　うつたふる
こゝろ　の　うち　の　こと葉　なれば。

たゞ　ひとこと　の　こたへ　だに
たまはゞ　うれし　身のうへ　や、
つき日　の　こま　の　あがき　にも
こゝろのこり　は　これ　ばかり。

いのち　と　たのむ　きみ　ゆゑに
しのぶ　おもひ　の　たけ　を　しも、
むね　に　たゝせて　たゝませて
かくし置きてし　わが　はれ衣。

つひに　着かざす　をりなくて
過ぎにし　きみ　の　かたみ　かも、
いかに　わが身　に　をさめよ　と
いまは　の　ひとめ　たまひけむ。

たとへ　この世　の　ちぎり　こそ
むすびかはさぬ　なか　なれど、
死出　の　たびぢ　の　みちづれ　の
かげ　とや　われ　を　見たまひし。

あるは　足らはぬ　わが身　をば
まいちど　をしへ　まはむ　と、
よみ　の　つかひ　の　みそば　まで
まねきやしけむ　ねもごろ　に。

いでぬ　こと葉　も　なみだ　より
わが目　うるみし　そのひま　に、
きみ　は　いつしか　默然　と
この世　の　いき　を　ひきとりぬ。

こゝろのこり　は　これ　ばかり。
きみ　が　みむね　も　きかなくに、
はかなき　戀　を　ためさむ　と
南天　の　實　に　ちかひして。

わが身　に　いだく　ねぎごと　の
まこと　かなひて　あるならば、
三世　の　とも　を　おもひ寝　に
きみ　は　ねふりて　居たまはゞ、

わが　まくたね　の　めざして　ぞ
ふたつ　の　えだ　に　わかれよ　と、
みあし　の　かた　の　つち　ほりて
うづめし　ことも　あだなりき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

木は　としごとに　おひ立てど
わかれぬ　みきの　ひとすぢ　に
わが　たまの緒　と　ほそりゆき、
實をば　むすばむ　ちから　なし。

たゞ　あさましき　まよひ　のみ
いや増す　根　とは　かつ　知れど、
拔く　にも　たへぬ　わが　おもひ、
こけ　を　ひとへ　の　冥途　かな。

鳴門海峡

おほ鳴門　みちしほ　たかき
うづ　の　うへ　に、あまつ
をとめ　も　舞ひくだりませ。

秋かぜ

とりが鳴く　てふ　あづま　なる
みちのくやま　に　咲きにけむ、
こがね　を　きたふ　白河　の
關　の　志みづ　の　ひゞき　にて
とぎ立てられし　氣　の　利がま。

秋　の　みかみ　は　み手　に　して
あたり　を　拂らふ　萬もつ　の、
枯れゆく　あはれ　を　むし　の　ね　に
志のぶ　は　ひとり　時めきて。

こゝも　たび寢　の　やど　として
ゆめ見　に　たへぬ　みの　かさ　を、
吹きとほすらむ　秋かぜ　は
わがふるさと　よ　まる木ばし。

奥州にありし日、舟を萬石浦に浮べて
うろくづ　の　へさき　かすめて
とぶ　おとに、月かげ
くらし　萬石が浦。

須磨の月夜。

秋　の　夜ふかき　なかぞら　に
うまれ　いでけむ　須磨　の　月、
照らす　ひかり　に　湯あみして
みや人　着る　か　松　の　かぜ。

ねいろ　も　志ろき　志ろがね　の
なみ　にや　かよふ　ものがたり、

誰れ と かたらむ 山 たかみ
むかしながら の 一の谷。

二の谷 さへも さえ〴〵て
なぎさ くまなく のこれども、
連錢あしげ に またがりて
落ちゆく 人 の かげ 見えず。

十萬餘騎 の つはもの も
しま の 千どり と 散りゆきて、
おくれし ふね の ゆくゑ さへ
いまは いづこ に まよふらむ。

むなしき あとを せめ來たり
院 の せん旨 は うけねども、
榮華 を つくす あめつち の
こゝろ を 追はむ わがとも よ。

屋島 の ゆふひ くれなゐ の
ちらふ すゑひろ 名 のみ にて、
壇の浦わ の そこ なくも
しづみ果てなむ 世 なりとも。

わが 盛衰 は とこしへ の
うみ に 浮かべて しのびなむ、
詩人 の こゝろ 月の夜 や
平家追討 萬古 やむ。

船頭唄

わしがをとこは 淡路の船頭で、
須磨や明石は ひとつのかぢで
かよひなれたる 濱べの千どり、
こゝろやさしゆて、たゆまぬむねは
沖のたいせん ゆら〳〵はしる。
おひて吹け〳〵、逆風も何んの、
受けてとりかぢ おもかぢやかろく、
帆まきあげたる ほばしら高かき
月にとゞけや こよひのおもひ。
わたしやひとりで 寐てをるわいな。

二首

來て見れば いてふ の
かれ葉散りしきて、わが
ふるさとは あれにける かも。

宮城野 の 小萩 が とこ に
置くつゆ の、しげき おもひ を
誰れ と かたらむ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

○野中至氏夫妻

都の屋に住ひ、火爐の邊りに暖を取り乍ら、誰か此の冬を寒しと云ふものぞ。頭をあげて白雪皚々たる彼の芙蓉峯を見よ。眼光の達すへき最上の頂點には野中至氏と其夫人とが、寒風破よりも痛き間だに於て、科學の爲めに其身を献けつゝある也。傳聞する所によれば、至氏この頃ろ病篤しと。其人の苦しきは更にも言はす、看護せる令夫人の心は如何におはすらん。左りとても、今となりては、衆の留むるを可かで良人に伴ひ登山せられしこそ、切めての慰さめなるべけれ。死すれば、即はち良人と同もに死し、同穴の縁にしみ盡さんこそ、貞ある女の至誠なれば也。左に氣象雜誌が掲載せし此の二人が書狀を轉載し、令夫人登山の折の消息を示す。

野中至氏の書翰　（十月十四日附）

(前略)兼て御高配に預り候荊妻登山の事寧慮の趣も申遣はし且は昨今已に降雪も有之たることゝ存居候處一昨日剛力兩三名召連れ登山仕り候尙は貴下へも御殿場より寸翰奉呈したる趣に有之同人が决心今更動かし難く存候につき此上は注意被爲下候通り攝生に注意致し首尾能く越年を遂ぐるの外無御座候尤も攝生の一條は縱令荊妻登山の有無に拘らず當初より事業の一項に加へ置きたる儀にて今更俄に心懸候儀には無之に付其儀は乍憚御休心奉仰候先は登山後當地の景況御報旁如右に御座候頓首再拜

野中千代子の書翰

一筆申上まゐらせいまだ御目もじ不申上候へ共益御機嫌能く被遊御座御目出度存上まゐらせ扨此度至思立に付ては不成一方御世話被爲下候趣毎度仝人より承はりつゝ今迄つい〳〵御無禮申上候同人も常々至て達者には御座候へ共此度壹人にては何分氣づかはしく存候に付兼て同行相たのみたることゝ御座候へ共同人に於ては一切さり川不中去なから萬一病の爲めに本望を遂かれ候事も御座候はゞ事の關係やういならず存申候に付强て登山致事に决心致候尤今日不意に參り候とも食物衣服に其外壹人分兼て中畑へ世話相たのみ置申候に付其邊は氣づかひ被下間敷やう御願申上候私登山の事見合せ候樣御中聞の程は辱けなく存候へ共何分餘儀なき義理にからまれ候事から御座候故思立たる事やみがたく內にて家を守るは女の道と申事は重々存ながら登山致候事とてが問敷との世のそしりはのがれ不申候へ共どの道不孝不慈のとがはまぬかれ不申と覺悟致候尙御願申上度はもし氣象學會に婦人の入會御差許被下間敷やとに角會費相添へ御願申上まゐらせ明朝は是非とも登山致度彼是取こみ御無禮申上候いづれ明年下山御目もじの上萬々御禮可申上候目出度かしく

十月八日　　　至妻　千代

和田様

○救世軍大佐ライト夫人小傳

ライト夫人は英國ロンドン府に生れ、幼少の時兩親に携へられニュージーランドに移り、年十四の時適救世軍の軍營に至り「救ひ」と記されたる文字を認め大に心靈上に變化を與へ直ちに大なる活ける神の婢となり耶の教を求め御子イエスキリストの淸めを願ひ全き基督信徒たる生活を始められたり夫人の嚴父は新聞記者にて或時救世軍主義の運動に厚き同情を表したる一文をその雜誌に掲載せられしに圖らざりき其雜誌は英國にあるブース將軍の手に接したり當時大佐ライト氏は中尉なりしがニュージーランドに渡り第一に右新聞記者の宅を訪はれしとこれぞその緣となり遂に結婚の式を擧けられたり、現今一男二女あり共に救世軍に捧げられ士官候補生として養はる。（鬨の聲第貳號）

○群馬縣公娼再置問題

本年又もや公娼再置の建議現はる。群馬縣は名にしおふ公娼全廢の率先者なり、如何でか此の醜論の公行を許さん。反對運動は、去年よりも更に激烈なりしが、別に人生に勢力ある寃物の運動も亦た莫大にて、ことしは、議員中にも公娼に加擔せしもの出で來にけり。議員全躰の色分は左の如し、

非公娼派　三十人　　正副議長二人
可公娼派　三十人

然るに、採決の折非公娼派は、激論の末憤然袂を拂つて退席せしに、殘りし可公娼派三十名の中にて、假議長を撰び、二十九名中、修正派六名、僅かに二十三名にて公娼設置の建議を通過せしめたり。

○神戸女學院二十年紀

創立以來二十年間入學生徒總數六百九十餘名卒業生徒總數百三十二名內教育に從事せし者三十二名あり又卒業後米國へ留學せし者は、

明治二十年　甲賀藤子　　撰卅修業の爲
仝　廿二年　渡邊常子　　カルトン大學へ
仝　廿三年　宮川敏子　　ホリオーク大學へ
仝　廿三年　塚本不二子　ウヰルソン大學へ後ペンシルニヤ大學へ
仝　廿四年　山脇花子　　ホリオーク大學へ
仝　廿四年　森　靜子　　エバンストン大學へ
仝　廿五年　雨夜久子　　カルトン大學へ

又卒業の後各地に學校を設立せしものは
　岡山縣に於て　山陽英和女學校　愛媛縣に於て　松山女學校
　群馬縣に於て　前橋女學校是なり、
又創立以來同院の建築或は地所購入等に際し屡々米國より寄送せし所の金額を大計する時は殆ど二萬弗に達し又本邦人より同件に關して寄附せしもの殆ど三千圓に及べりとぞ。

○家庭と佛敎

佛敎界近時の擧動の一は、大に家庭の改良に注意し來りしとこれ也「日本宗敎第六號は、此の大勢を評論して、明敎新誌が「如何にして家庭を敎化すべき乎」と論ぜしもの。日蓮宗の敎友雜誌が、「佛敎と家庭」として論ぜしもの。反省雜誌か「敎界と俗界との密接」と題して家族的宗敎か造るべしと言へるもの、眞言宗の「密嚴敎報」が論などを列擧して、仔細に其所論を紹介したり。

○伊西亞の婦人

米國のアンナ、カブリスト伯爵夫人、先きつ頃ヒューマンタリアン雜誌紙上に、「米國婦人の地位」を論じて、文字の米國婦人の讃嘆に及ぶもの多し。曰く、

米國の婦人は之を他の歐洲諸國の婦人に比するに、一層勤勉にして、泣くこと少く、愛憎の念に强きが如く、一層の思慮を勞して後結婚し、一旦撰んで之に從ひし處には能く忍び、母たるの天職を重んずること更に厚く、其子女を養育するが爲めには、甚だしく身心の力を勞す。强壯健全なる子女を擧けんと、男兒は獅子の兒の如く强壯に、女兒は鴿の如く溫良ならんとは、普通の米國婦人が第一の願望なり。上等社會及び敎育ある人士の社會の婦人が、自ら夫婿を揀擇する場合には、情慾によらず、戀愛にもよらず、又は富貴權勢にもよらずして、單に、「此男子は我子女の爲めに善良なる父たり得べきや否や」との問題を標準とすること稀にあらず。

伯爵夫人はまた自國婦人を以て、社會上及び政治上に於て、好地步を有せるものと說いて曰く、

最後に予は米國婦人は、其階級の如何に拘らず、幸福なる運命を有せるものなりと斷言するに憚らざるなり。其現實の地位より比較し來れば、米國婦人は、他歐洲諸國の婦人よりも好地位を有し政治上及び社會上に於ける其勢力も亦更に大なり。

㈠新設計畫中の女學校　　前々號に列擧せし以來、更に報道に接せしものは。曰く、岡山に女子手藝學校。福岡に、高等女學校。曰く、廣島高等女學校に補助費。曰く、宮崎高等女學校の寄附續々。曰く、青森縣に千葉昌胤氏なる人女子得業學校を設けんとして知事の認可せざるに物議を生ず。盛なりと謂ふべし。

　女權の擴張　　したる我國には、女子の亂心者多くして、妄想、憂苦自由心等之が原因を爲すにありと云ふと、統計學雜誌は論ず。

　同志社女學校の秋期運動　　か佛敎禁酒主義の反省雜誌は記述して、午餐の祈禱を捧げし一女子の祈りの言に至り、評して曰く、

質に基督敎徒の注意周到なる、一の遊戲一の愉快、苦神の惠與に歸して感謝を捧げ、以て之の信仰を堅くし且つ新たにす、佛物を食し佛物を着け佛物に住する少女が身如何なる言をか捧げて、佛陀に感謝し奉らん、冷汗背を濕し、慚又慚愧又愧、平日の淸快も直ちに滿身の痛苦に變じ、只幸にして此露の命を保ち敎の爲に盡すの時を得ば、一身の苦樂擧げて佛祖の寶前に捧げ、以て萬海一滴の報恩に供せんと感激涙下るを覺えざりき、

㈡長崎婦人會　　安部井辰子女史の熱心なる主唱扶助によりて多年繼續せし同會は、去廿三日總會を開きたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎良友會　は二十六年三月以來の設立にて、其十一月よりは、王子孤女學院の爲めに慈善事業を爲すとの集まりとせられしが、近頃の役員左の如し、

會長　星野峰子　書記　乘竹ろく子　會計中田ます子

書記兼會計　室原りつ子

◎横濱婦人矯風會　の改撰役員は左の如し、

會長　角倉さが子　副會長　淺岡たま子

會計　里吉きん子、林たれ子　書記　相川のぶ子、小林まさえ子

◎名古屋婦人講話會　は曩に陸軍病院に寄附し、近くは愛知育兒院へ來春の餅を寄附するなど、不斷勉めたりと云ふべし。

◎東京婦人矯風會　去七日同會の年會あり、役員改撰の結果左の如し、

會長　雜賀あさ子　副會長　未定

書記　山路たれ子　會計　原田さき子

◎結婚及産兒統計　近頃開會せられたる佛蘭西人類學會へシェルヴァンの提出せし統計に據れば年齡十五歳以上の男女にして結婚したるの者千分比例は左の如し

葡萄牙	九一・六	和蘭	四九・〇
獨逸	五三・〇	佛蘭西	四五・八
英蘭及威爾斯	五二・〇	白耳義	四一・九
丁抹	五二・〇	希臘	四一・六
澳地利	五一・三	蘇格蘭	四〇・九
伊太利	五〇・一	瑞典	四〇・八
芬蘭	四九・二	愛蘭	二三・〇

生活する正出兒の既婚婦人千人に對する比例は左の如し

獨逸	二七〇	瑞典	二四〇
蘇格蘭	二六九	愛蘭	二五〇
白耳義	二六五	瑞西	二三六
伊太利	二五	佛蘭西	一六三
英蘭及威爾斯	二五〇		
澳地利	二五〇		

私生兒の千分比例は左の如し

獨逸	二六五	澳地利	四四四
蘇格蘭	一九九	瑞典	四四四
白耳義	一九八	愛蘭	四一
伊太利	二四六	瑞西	一〇二
英蘭及威爾斯	一二一	佛蘭西	一六七

是に由りて之を觀れば佛蘭西は結婚統計に於て其他の歐羅巴主要諸國よりも稍々少數を示し正出兒の統計に於ては最後に位し人口增殖の點に於ては假令私生兒を算入するも遙に獨逸澳地利及伊太利の後に在りと云ふ

（去月十五日香港デイリー、プレッス）

露點　七

◎男節女操の腐敗（四期に分ちての進步）『惟一』第二十三號（松下某）
◎貧母繼母の人情　『德風』第三十八號（大行老生）
◎佛教修身談夫婦の心得　『德風』第三十八號（小泉了諦）
◎米國に於ける婦人問題　『宇宙神教』第五卷第三號（レビット氏）
◎佛教と家庭『教友雜誌』第二百四十二號（社說）
◎一葉女史の「にごりえ」（の評）『明治評論』（小湘庵主）
◎如何にして家庭を教化すべき『明教新誌』十一月廿日分（社說）
◎大山侯爵夫人釋雲迦律師に聽聞す　『明教新誌』十一月廿日分
◎小學校醫としての兒科醫『教育時論』第三百八十三號（三島通良氏）
◎歐洲諸國の幼者保護（官報）『同前』
◎マダム、アダムジュリア、ラムベーの傳及肖像『國民之友』第二百七十四號
◎婦人の感化（オドラム女史の事）『北海之光』第二十九號
◎日本女文學　『山梨日々新聞』に楓葉女史の文連載掲出せらる。
◎兒玉松枝子の追悼　『基督教新聞』十一月廿二日分（成瀨仁藏）
◎鄭成功の母田川氏の廟　『日本』十一月二十二日
◎遙に富士山頭の野中夫人を思ふ　『新潮』第五號
◎女子教育奬勵二策　『同志教育』第十五號（英文）
◎樺山資紀婦人を優待す（古愚庵）　『朝野新聞』十二月廿日
◎ダンテの女性（ジョルデアン氏の說）　『東北文學』第十一號
◎佛教修身談中の夫婦の心得（小泉了諦）『德風』第三十八號
◎婦女の官職を帶ぶる理由（救世軍に女官ある解明）『関の聲』第二號
◎ライト夫人小傳　『関の聲』第二號

◎前號細谷氏「心身健全の一助」文中其必要の理由の章結尾より九行目「静かに運動しつゝ」の次に時に兩手を頭に上げ又下げの一句を補入す。

文藝倶樂部臨時增刊

閨秀小說

口繪木版彫刻極彩色（寫眞銅版）肖像●小金井喜美子君●若松賤子君●樋口一葉君●北田薄氷君●田邊稻舟君●伊藤簪花君●石榑若子君●三宅花圃君●大塚楠緒君●藤島雪子君●跡見玉枝君●高林芳谷君●竹村耕靄君●杉浦玉舟君……渡邊省亭筆●跡見花蹊君●野口蘋君（景色）●東海道興津の富士●奈良猿澤の池●同春日神社の鹿●甲州猿橋　筆蹟

十二月十五日發行全一冊菊版頗美本紙數二百四十餘頁木版密書數十個入正價金十五錢郵稅二錢五厘

小說

はしがき……中島歌子
萩桔梗……花圃女史
名譽夫人……小金井喜美子
忘れ片身……若松賤子
十三夜……一葉女史
黑眼鏡……薄氷女子
白ばら……稻舟女子
手箱の内……藤島雪子
暮ゆく秋……大塚楠緒女
村時雨……簪花女史
片おくれ……ゆかり女
刷毛彩色……石榑わか子
やみ夜……なつ子
閨秀小說の奥に……西升子

新躰詩

夜嵐……島田隆子●水車……島田愛子●こしのみそれ……嚁須賀子●大磯の四季……西升子●西間の月……竹屋雅子●片戀……鶴花姬●秋汐邊……森策子●時雨……鳥丁子●千鳥……一川虎子●淺茅の露……中村田鶴子●玉子賣……紫水女●斷腸……岡秋好女●おはぐろ樣……酒井すが子●墓畔の美人……鹿島さくら子●十五夜……諏訪晴子

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

日本の家庭

「日本の家庭」は有益にして面白き家庭の雜誌なれは男子も女子も老人も少年も必ず讀まざる可らず

樂しき新年來る、家庭和樂の好時期來る！

來る正月元日發行の「日本の家庭」第二號を見よ！

二十九年一月一日發行の「日本の家庭」第二號には

社說　新年。西村茂樹元良博士篠田利英諸氏の有益なる論文後藤宙外江見水蔭二氏の小說ワシントンの

絵入りかな附每月一回（一日）發行一冊價郵稅共七錢半年分郵稅共四十一錢一年分同八十錢三年

家庭お正月遊の數々。笑ぐさ小栗風葉氏の月の

その他敎育、はなし、衞生、家事、附錄雜報寄書の諸欄には有益にして面白き記事多し

新年附錄には一葉女史の優美なる小說あり

又美麗なる口繪と數多の挿繪あり

發行所　東京市麴町區富士見町二丁目三十七番地　日本の家庭社

新刊豫告

廿九年元旦
初號發刊

虛を去り僞を排し、至誠事に當り百難屈せず、罪惡を其根底に衝き、身を以て道に献す。之を直入の主義と云ふ。今や時勢此主義に待つこと其れ甚だ急なり『直入』於是乎出づ『直入』欄を分つこと五 曰く

●劒(つるぎ) 僞善悖德無智迷信、筆誅苟も假さず。
●焰(ほのほ) 罪惡汚醜を燼滅して餘毒なからしむ。
●淚(なみだ) 萬斛の熱淚、煩悶苦惱する者の爲に灑ぐ。
●血(ちしほ) 斯道の爲に殉したる仁人義士の遺烈を傳ふ。
●響(ひゞき) 形小なりと雖感應大なる者は輙ち報す。

『直入』發行規定

(一)直入社員は、每月一回、八頁、五百部の印刷發兌に關する凡ての勞力費用を分擔する事。(二)同志者の寄附を得は紙數、部數、又は回數を增加する事。但し實價は一部金一錢とする事。(三)社員は各處に出張して本誌の寶擴を力むる事。但し賣上金及び寄附金は一切本誌發行の費途に充て且つ每號會計の報告を、紙上に於て公にする事。(四)本誌は交換の外何人にも無代價にて進呈せざる事。(五)掲載の文章は可及的簡潔にして每項十行を越へざる事。(六)同志者の寄稿は一切返書せざる事。但し一項十行(二十字詰)以下に限る。且つ省畧は本社の隨意たる事。

謹告〜『直入』は賣上高及び同志者寄附金の增加に從ふて發展する者なれば、多數同志者の購讀及び寄附を熱望す。蓋し本誌の發達は是れ我主義の伸張なればなり。

發行所 東京市麹町區下六番町十三番地 直入社

直入 第一號 豫告

第壹號目次 題歌(湯谷紫苑)●發行之辭●直入發刊の祝詞(德永平次)傳道管見(小西增太郎)●厭世懷疑の救ひ(巖本善治)●傳道は短刀直入を可とす(島貫兵太夫)●人道擁護の精神(渡瀨常吉)●平凡なる偉人物(櫻井鷗村)涙痕の福音(青柳猛)●軟骨動物●宣敎師攻擊●天意〳〵と云ふ者●フロックコートと自轉車●敎會獨立●衣服と食物●得意●無宗派●淺薄なり人の情●卑屈なる濟世主義●ラシヤメンと女學士●敎會の元氣及威望●青年の薄志弱行●人は製造械乎●實用敎育を排る●批評讒議の雜●目藥を買へ●與松村介石君書●野中氏夫妻●市原不破服部三君●毫遊本邦人の醜鉢●群馬の存娼●宣敎師敎練所●神學生の不勉强●開望の讀者●大須賀亮一君●石井十次君●名を宣敎師と呼ふ

明治女學校卒業生會報告の廣告

『明治女學校卒業生會報告』は、一年三回(一月、五月、八月)出版し會員にのみ頒布致候處、會員外にて御望の御方尠からず、遂て懇望も有之候に付、次回發行第六號よりは御望に應ずるとに定候間、御志ある方はかねて御申込置度候一册四錢、郵税二錢、即ち一年にて十八錢宛の實價を郵送被遊度候

東京下六番町六番地
明治女學校内　卒業生會委員　白

圖書閱覽所廣告

日刊新聞十數種を始め文學宗敎政治法律經濟農工商其他の諸雜誌二百種の外、新刊書類小說等及び西洋雜誌十數種を備付け廣く公衆の閱覽に供す

・日見料金一錢○十回以上割引あり○午前七時開場午後十時閉場○年中休日なし

神田區北神保町十九番地(順天求合社筋向)
共立文庫 圖書閱覽所

(追白、本所は前に麹町區下六番町六番地第七號舍にありしを今回右の地に移轉一層擴張したるもの從前に比して規模頗る大)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

英國大家ダルヴヰン氏著　文學士立花銑三郎先生譯

生物始源　全

◎四六形約八百五十頁
◎色クロース表紙美本
◎定價金壹圓五拾錢
◎來年二月出來

現世紀に於て進化論を道破し啻に生物學に於けるのみならず思想界の全般に一大革新を喚起したるもの孰れかダルヴヰン氏の生物始源の右に出つるものあらんや、故に我社は學術上不朽の大作なる事を確信し立花銑三郎先生に請ふて之れを譯し左の豫約法に依り之を廉價にて請ふ購求せられんことを

本年十一月中一時入金のもの　金八十錢
十二月中一時入金のもの　金九十錢

但市外のの分は外に郵送料十四錢を申受る事

東京市日本橋區鞘左衛門町
電話千二百二十三番

發行所　合名會社　經濟雜誌社

岡山孤兒院廣告

一本院事夏期休暇ノ際ニハ特ニ[illegible]ナリ依テ[illegible]九月六日ヨリ十一月末マデニ各種ノ教育愛兒姉諸君ヨリ[illegible]成下候金高ハ實ニ千八百九拾[illegible]錢ニ達シタメニ本院ニハ安全[illegible]ノ試煉ヲ[illegible]巳ナラズ夏期寤寐ノ頃マデハ尚ホ未ダ不完全ナリシ各[illegible]業部モ大ニ進歩整頓シ之レニ從事スル兒女ハ各其ノ勞働ニ由リ己レノ一「パン」ヲ食スルコトヲ得ル樣ニ相成申候之レ全ク天父ノ御惠ト天下諸教育愛兒姉諸君ノ御援ケニヨレリト感謝仕候

一實業部整頓イタシ各自己レノ「パン」ヲ食スルコトヲ得ルノ場合ニ相成申候ニ付此度「個人的勞作的獨立命」ヲ發シ申候「個人的勞作獨立」トハ例ハ活版、機織ニ從事スル兒女ニシテ一日十錢ノ賃錢ヲ得ルトキハ[illegible]付錢丈ヲ食料ニ拂ハセ其ノ餘ハ各自ノ所有トシテ孤兒院貯蓄銀行」ニ預ケシムルノ法ヲ云フ

一此度右ノ目的ニ基キ「岡山孤兒院[illegible]」ヲ發行[illegible]

一天下ノ事業ヲナスニ於テ天下ノ[illegible]品ヲ受クルノ[illegible]然ナリ[illegible]此度更ニ[illegible]法ノ如ク改メ偏ク全世界ノ有志者ノ義捐金品ヲ受ケ未ダ獨立自活スルコト能ハサル幼年兒女ノ[illegible]支辨イタスコトニ相定メ申候

維持法

天父ノ冥助ト、院内各自ノ勞働ト天下有志家ノ義捐金品トニ由ッテ維持擴張ス

一六才以上十二才以下ノ無告ノ孤兒ハ[illegible]モ何名ニテモ入院[illegible]申候故憐レナル孤兒見當次第急速ノ無告ノモノ[illegible]ルコトナ[illegible]御送リ被下度候

一以來ハ預兒ノ入院ノモ許シ申候但シ入院ノ勞作的[illegible]ノ出來ルマデハ[illegible]教育費トシテ金三圓ヲ要シ申候

一來年一月ニハ「二十八年度岡山孤兒院年報」ノ和英兩文ニテ印刷仕候[illegible]御覽被下度候　但シ郵券貳錢ヲ要シ申候

一來年一月ヨリハ和英兩文ニテ「岡山孤兒院雜誌」ノ發行仕候間御覽續被下度候

一當時本院ノ實業ハ左ノ如クニ御座候

一、活版印刷部（二十三名）　二、麥稈「サナダ」製造部（二十八名）　三、「マッチ」製造部（六十五名）但シ市內業製造家ノ委頼ニ由ッテ　四、機織部（五十九名）但シ當時ハ[illegible]陣業[illegible]物組ノ委頼ニ由ッテ　五、大工部（七名）　六、日向茶臼原農業部（五十七名）

一、本年ハサツマ芋二丁歩野稻二丁歩田ヲ作リ殆ント一年間ノ食料ヲ收穫スル積ナリシモ野稻ハ三回ノ大風ニテ全ク吹キ荒ラサレタメニ尚ホ全ク自活ノ場合ニ至ラズ[illegible]年僅[illegible]十名ノ年長男兒ハ去ル三月新[illegible]法[illegible]布[illegible]常ニ[illegible]シテ近[illegible]ノ農[illegible]トシテ奉公シイマ[illegible]忠實ニ勤メ居申候

一學問、裁縫ハ午后六時ヨリ九時マデ授業致居候

續々近況御尋問被成下候方有之候故不取敢廣告仕候也

明治二十八年十二月

岡山市門田屋敷

岡山孤兒院

日本宗教第六號目錄

社說

宗教の本色及法士の職責……三三七

論說

余が佛說に關せる諸答辯……加藤弘之……三四〇

余の宗教觀を讀む……村上專精……三四二

友徒の宗教の特色……新渡戸稲造……三四四

ユニテリヤン教義……クレー、マコーレー……三四七

天理教利害論……かへるやま……三五二

問答

大島君に答ふ……釋無空……三五七

釋宗演管長の「宗教の性質を論じて今日の佛教徒に望む」てふ論に付て教を管長に乞ふ……和田教山……三六〇

雜纂

家庭に於けるトルストイ伯……小西增太郎……三六一

喇嘛教一斑……酒卷鷗公……三六三

目白僧園を訪ふ……三六七

久米邦武氏の宗教談……三六九

思潮

武士道と宗教……三七一

武士道と快樂說……六合雜誌

武家教育……重野安繹

邦人性格上の一大欠點……姉崎正治

ストアの精神と武士の氣風を比較し我國民の氣風に及ぶ……六合雜誌

武士道の興起を計る事……東京府教育會

武士道と基督教……片岡健吉

傳道の戰に先づ占領す可き二個の敵壘……巖本善治

家庭と佛教……三七四

如何にして家庭を教化すべき乎……明教新誌

佛教と家庭……教友雜誌

家庭の教訓……同前

教界と俗界の密接……反省雜誌

東本願寺の家庭・栃木茂問……日本人

南都の宣言……三七六

所感……古木寅三郎

教外者の宗教談……三七七

西村茂樹氏の宗教論……學士會院雜誌

黒田侯爵の宗教談……日出新聞

桂中將の佛教談……明教新誌

杉浦重剛氏の教育宗教談……每日新聞

禪學論……三八〇

無情說法……禪學

禪と公案……同前

辨妄一則……同前

禪學の効果……禪宗

禪學の流行に就て……釋宗演

道……元良勇二郎

宗教家と社會問題……三八三

宗教家の慈善事業……姉崎正治

基督教徒と社會問題……福音新報

現住和尚の任務……高野の光

佛教の將來……三八五

將來佛教の地位……佛教史林

十年后の日本佛教……反省雜誌

救世軍に對する論評(三たび)……三八六

救世軍來る……反省雜誌

救世軍來……正法輪

救世軍に對して……高野の光

救世軍の長所……押川方義

救世軍……護教

加藤博士の質疑に對せる答……三八八

謹で加藤博士に答ふ……四依一六

加藤博士の質疑に答ふ……傳燈

加藤博士の三疑問……境野哲海

外來宣教師問題……小崎弘道……三九〇

罪に種々あり……古川老川……三九〇

唯心の垂示……雲照律師……三九〇

救世教開立の所因……救世の光……三九一

深き所に漕ぎ出よ……福音新報……三九二

神道とは何ぞ……まこと……三九二

儒教と基督教の類似……ノアーベル……三九三

秘密安心教導示要……雲照律師……三九四

新著批評……三九五

勝曼經義疏●問答燈●井上博士講論集●無盡燈

雜誌評論……三九六

●教林、惟一〇まこと〇大道叢志●十善寶、反省雜誌、佛教史林(〇宗教〇學術叢誌)教報(三)、明教新誌、寶、高野山光、法の雨、曹洞教報、●六合雜誌、宗教(〇)基督教新聞、評論(〇)、救世〇正教新報(〇)、福音新報(〇)、護教

雜誌目錄……四〇二

新刊雜誌三十九種

普通新誌教論一覽……四〇三

論說談話十四項

時流……四〇四

日本宗教界〇海外宗教界〇片々

定價一冊八錢、郵稅一錢。六部前金郵稅共四十六錢也。

東京下六番町六番地

日本宗教發賣所

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

布川靜淵　小此木信一郎二氏合著

俳諧史傳

和製美本　紙數三百二頁　中本全一冊

定價廿七錢　郵送税四錢宛　許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡、無限の烟波渺々として際なし　俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて諧謔を增にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、幽妙なる詩天地に逍遙す。其源流に溯り、其發達を敍し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるを期したるは、我が『俳諧史傳』なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり。之を聯れば、整々・卷の史篇となす。逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如からしめむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、敍記精確剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可らず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る潤大なる、敍事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、奇警、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元　東京下六番町六番地　女學雜誌社

鈴木弘恭大人講述

百人一首講義

歳暮、年頭の遺ひものとしては上品にして且つ趣味あると、百人一首の講義ものに及くはなし。而も此講義物の中、本書が其の第一位に立つとは、初版以來改版の度々なるを以て證ずべし。

一冊正價二十五錢　郵税四錢

六版　發兌元　女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價	金拾錢
	一年前金	金壹圓（無郵税）
廣告料	一行一回（廿七字詰）	前金十錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
	但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く	
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし	
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし	

明治廿七年十月十四日內務省許可

明治廿八年十二月廿四日印刷

明治廿八年十二月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY